石巻市文化財調査報告書第4集

田道町遺跡

―― A地点発掘調査概報 ――

1992

石巻市教育委員会
株式会社 旭 産 商

田道町遺跡－A地点発掘調査概報－正誤表

頁	行	誤	正
例　言	5	…国土地理印…	…国土地理院…
調査要項	18	＿＿＿＿	梶原　英樹
7	19	…が混入している…	…が混入している。…
9	断　面　図	B　　B´	B´　　B
9	観察表　5層	灰化物を少量含む	炭化物を少量含む
9	観察表　6層	…灰化物を少量含む	…炭化物を少量含む
20	4	〔遺構確認〕	〔位置〕
23	断　面　図	A　　＿＿	A　　A´
25	3	〔重複〕第18号住居…	〔重複〕第17号・第18号住居…
32	観察表　P9 3層	黄褐色土砂＿＿＿	黄褐色土砂を含む
34	4	…の破片が…	…の破片を…
38	8	…が3基が確認され、…	…が3基確認され、…
38	12	…確認された。〔重 複〕…	…確認された。　（改行） 〔重複〕…
43	観察表　1～4	土嚢出土	土壙出土
44	18	…円錐台状を呈した、…	…円錐台状を呈し、…
44	19	…球形を呈した、…	…球形を呈し、…
46	2	1．田道町遺跡C地点は…	1．田道町遺跡は…
50	写　真	第1号住居跡	第2号住居跡
50	写　真	第2号住居跡	第1号住居跡

序

仁徳天皇五十五年に上毛野田道が蝦夷と戦い敗死した伊寺水門は、古来石巻であると信じられています。もとよりこのことは史実そのままではありません。しかし、この上毛野田道にちなんで名付けられた田道町には、その命名の由来にふさわしく、古墳時代から平安時代にかけての遺跡があります。

平成２年この田道町遺跡の隣接地での宅地開発計画の協議があり、現地踏査を行ったところ、土器片の散布が確認され、田道町遺跡がその付近まで広がっているものと推定されました。そこで、平成３年に事業者負担で発掘調査を実施いたしました。

文化財は、先人の残した貴重な文化遺産であり、石巻に生きた人々の生活のありかたを語ってくれるかけがえのない資料です。これまで、石巻市の古代遺跡は、五松山洞窟遺跡を除いて、ほとんど未調査であり、石巻の古代は謎に包まれたままでした。この発掘調査により石巻の古代史を多少なりとも解明することができたら幸いと思います。

この発掘調査にあたり特段のご配慮を賜った株式会社旭産商、地主の今野勝樹氏とご家族の皆様、調査にご協力をいただいた各氏・各機関に紙面を借りまして感謝申し上げます。

平成４年８月

石巻市教育委員会教育長　阿　部　　宏

発 刊 の 辞

石巻市には国指定史跡沼津貝塚に代表される数多くの遺跡があります。そのなかでも田道町遺跡は古墳時代から平安時代までの遺跡として知られています。

当社が、この田道町遺跡の近くで宅地開発を計画いたしましたところ、計画地まで遺跡が広がっていることがわかり、発掘調査を実施することとなりました。

調査の結果、古代の住居跡29軒をはじめ、数多くの遺構遺物が発見されたとのことです。

石巻市において、発掘調査の専門職員を配置した初年度の最初の調査となったということも聞き及んでいます。

この度、その発掘調査結果の報告書が刊行されることとなりました。当社がこのような形でかかわった発掘調査の報告書により、石巻地域の古代史の研究に役立つ貴重な資料が永く残ることは誠に意義深いものがあります。

最後になりましたが、この調査を実施していただきました石巻市教育委員会、ご指導を賜りました宮城県教育委員会、地主の今野勝樹氏に厚く感謝の意を表します。

平成４年８月

株式会社 旭産商
代表取締役 本 郷 耕 志

目　　次

Ⅰ　発掘調査に至る経過 …… 1
Ⅱ　環境と立地 …… 1
Ⅲ　発見された遺構と遺物 …… 3
　1．基本層位 …… 3
　2．発見された遺構と出土遺物 …… 7
　3．掘立柱建物跡 …… 31
　4．溝　　跡 …… 36
　5．土壙・井戸跡 …… 38
　6．その他の遺物 …… 44
Ⅳ　ま　と　め …… 46
Ⅴ　写 真 図 版 …… 47

例　　言

1．本書は、株式会社旭産商の宅地開発に伴う田道町遺跡の事前調査の概報である。

2．調査は、石巻市教育委員会が主体となり、石巻市教育委員会社会教育課文化係が行った。

3．土層等の色調表記については、『新版標準土色帳』9版（小山・竹原：1989.5、日本色研株式会社）を利用した。

4．本書の第1図は建設省国土地理印発行1／25,000「石巻」を複製して使用した。

5．本書の編集・執筆は石巻市教育委員会社会教育課文化係芳賀英実・佐々木淳・岡　道夫が行い、遺物実測図は木暮亮が作成した。

6．出土した遺物および調査記録類は石巻市教育委員会で保管している。

調　査　要　項

1．遺　　跡　　名　　田道町遺跡Ａ地点

2．遺 跡 所 在 地　　宮城県石巻市田道町二丁目

3．調査対象面積　　2,200㎡

4．調 査 主 体 者　　石巻市教育委員会

5．調　査　期　日　　平成３年４月10日から平成３年８月23日

6．調　　査　　員　　石巻市教育委員会社会教育課

佐藤　　滋　　佐々木　淳　　芳賀　英実

岡　　道夫　　木暮　　亮

7．調　査　指　導　　宮城県教育庁文化財保護課

佐藤　則之　　菊地　逸夫　　古川　一明

吾妻　俊典　　窪田　　忍

8．発 掘 作 業 員　　相沢利喜子　　秋沢ちよ子　　大沼　忠雄　　勝又　正男

亀山美代子　　小泉久美子　　小泉　文男　　穀田　吉夫

西條　芳子　　酒井　清與　　佐藤ゆきの　　鈴木　友春

高橋　盛雄　　長谷川信雄　　松川　利克　　八島　　寛

渡辺キミ子

9．整 理 作 業 員　　相沢利喜子　　伊藤　　力　　海老沢　洋　　西條　芳子

関根　正美　　目黒たみ子

10．調　査　協　力　　宮城県教育庁文化財保護課　東北歴史資料館

石巻文化センター　石巻市建設部道路課　石巻市総務部総務課

株式会社旭産商　株式会社木村正友設計事務所

今野　勝樹　　桑原　滋郎　　藤沼　邦彦　　白鳥　良一

小井川和夫　　阿部　博志　　佐藤　敏幸　　中村　光一

三宅　宗議　　茂木　好光　　佐藤　雄一　　木村　敏郎

石塚　和雄　　鈴木　東行　　川名　紘一　　石垣　　宏

Ⅰ　発掘調査に至る経過

平成２年12月、民間企業による宅地開発の事前協議が、建設部都市計画課から石巻市教育委員会にあった。田道町遺跡及び横堤遺跡の隣接地であったため教育委員会社会教育課文化係職員が、12月18日に現地踏査を実施したところ、土器片の散布を確認した。そこで都市計画課に対し、宮城県教育委員会と早急な協議が必要である旨を回答した。

平成３年１月18日、事業者から宮城県教育庁文化財保護課長あて協議書が提出された。協議の結果、４月上旬から事業者の経費負担で遺構確認調査を実施することとなり、４月10日に調査を開始した。

調査を開始してすぐ、土壙や竪穴式住居跡等多数の遺構を検出した。そこで事業者・宮城県教育委員会・石巻市教育委員会の三者で遺構の保存について協議したところ、造成計画地のうち道路となる部分及び表土が薄く遺構の濃密な部分約2,000平方メートルについて記録のための発掘調査を実施することとなり、その他の地区は盛土して遺構を保存することとなった。そこで確認調査に引き続き事前調査に着手した。

発掘調査は東区と西区に分けて実施し、東区は全面発掘を行い、西区は道路予定地を中心にしてトレンチを設定して調査を行った。

Ⅱ　環境と立地

田道町遺跡は、ＪＲ東日本仙石線陸前山下駅の東側の住宅街、石巻市田道町一丁目から二丁目にかけて存在する遺跡で、標高1.5から1.8メートルの沖積平野の微高地上にある。

田道町遺跡は、古墳時代から平安時代までの土器が散布する遺跡として知られ、過去には南小泉式の土師器壺の完形品も出土している。今回の調査区から南東約200メートルの地点で、昭和51年（1976）１月に当教育委員会が遺構確認調査を実施している。その結果、古墳時代から平安時代にかけての「溝状遺構」・「土壙状遺構」をいくつか確認している。

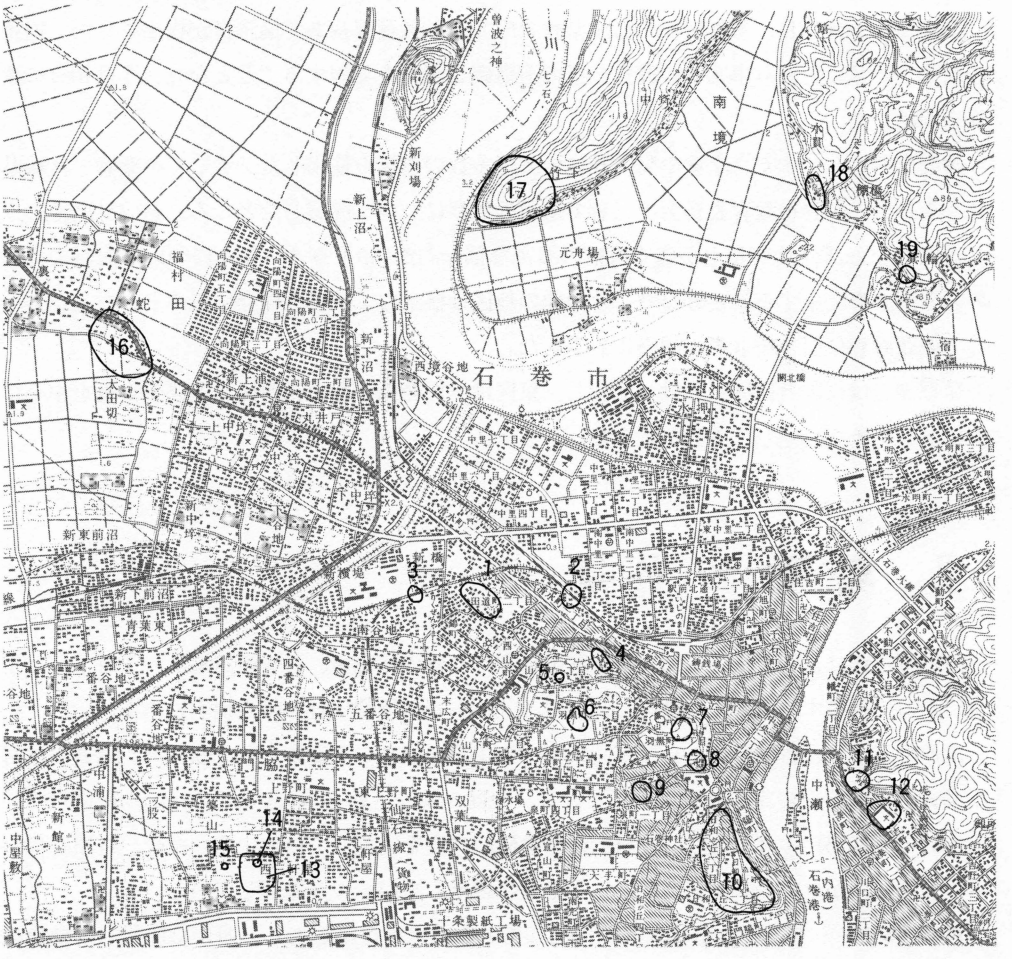
東側約500メートルには墨書土器が出土している清水尻遺跡があり、西には隣接して横堤遺跡がある。清水尻遺跡は、８世紀後半以降の牡鹿郡衙とする説のある遺跡である。

田道町遺跡は、石巻市西部の平野部に位置する。本遺跡の北約１キロメートルのところで南流してきた北上川が東に向きを変えている。北上川は、その後再び流れを南に変え、本遺跡の南東約４キロメートルのところで太平洋に注ぐ。南東約500メートルには標高50数メートルの鰐山丘陵（日和山丘陵）が聳え、約３キロメートル南は海岸であり、仙台湾の支湾である石巻湾に面している。

本遺跡付近の地層は旧河底をうずめた堆積物で、下位から、蛇田層・釜層・沼向層・中埣

層・雲雀野層である。このうち中埣層は、河川の氾濫時に堆積した砂泥による自然堤防であり、本調査で地山と認定した層である。

微地形区分図によれば、本遺跡付近は、発達した自然堤防と後背湿地となっており、今回の調査地点は、そのうちの後背湿地部分である。しかし、昭和30年代の航空写真を見るかぎり、本遺跡のエリアは全て微高地となっており、本遺跡は、自然堤防上に立地すると考えられ、少なくとも今回の調査地点付近まで自然堤防とみなされる。このことは、今回の調査区東端で旧地形の落ち込みを確認していること等とも符合する。



No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	田道町遺跡	古墳・奈良・平安	8	永巌寺貝塚	縄文・奈良・平安	15	釜西古墳	古墳
2	清水尻遺跡	古墳・奈良	9	梅ケ丘窯跡	奈良・平安	16	新金沼遺跡	古墳～平安
3	横堤遺跡	縄文・奈良・平安	10	石巻城跡	中世	17	竹下館跡	中世
4	明神山下貝塚	縄文	11	五松山洞窟遺跡	弥生・古墳	18	水貫山遺跡	平安
5	明神山経塚	近世	12	湊小学校遺跡	奈良	19	箕輪山貝塚	奈良・平安
6	明神山遺跡	平安	13	西三軒屋遺跡	古墳・近世			
7	羽黒山遺跡	平安	14	釜東古墳	古墳			

(註) 宮城県教育委員会　宮城県文化財調査報告書第125集　宮城県遺跡地図　昭和62年「第58番石巻」に拠る。

第1図　田道町遺跡周辺の遺跡

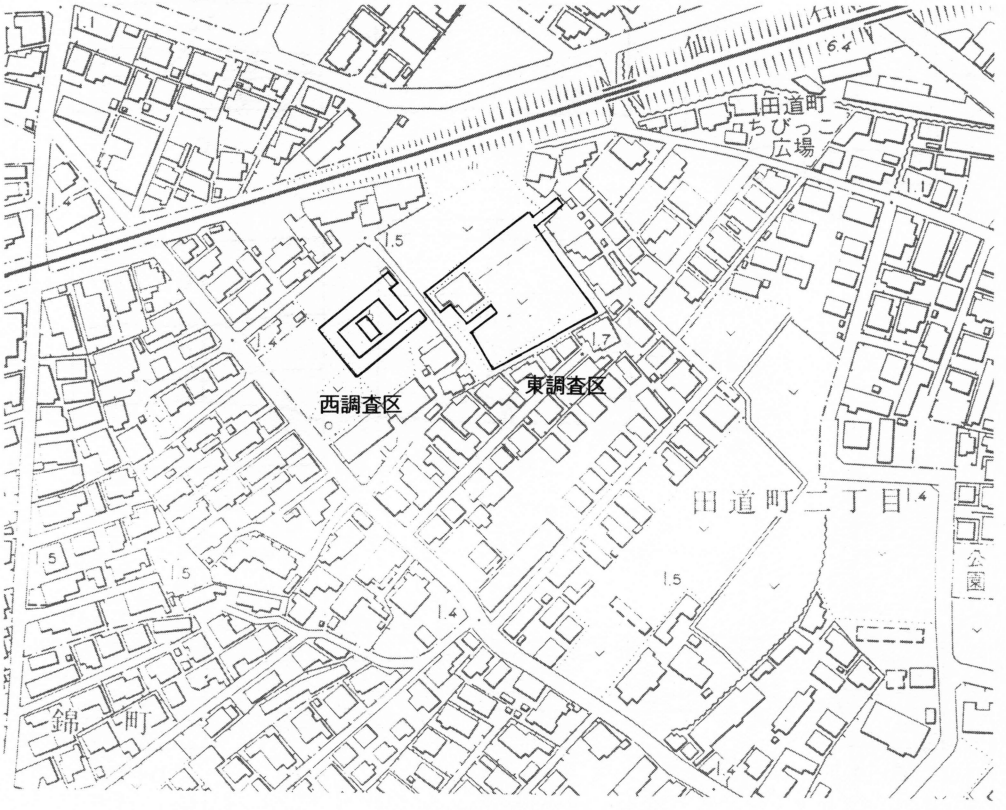
Ⅲ　発見された遺構と遺物

1．基本層位

今回の調査は、西調査区と東調査区の２つに分けて調査を行った。標高は約1.4mであり、地山までの深さは西調査区で50～90㎝あり、地山面は調査区の東側はほぼ平坦であるが西側で緩やかに落ちこんでいる。東調査区の地山までの深さは西区と同様50～90㎝であり、地山面は西側がほぼ平坦で東側が落ちこんでいる。地山までの堆積層は西区で基本的にⅢ層に分けられ、東区はⅣ層に分けられる。ただ、どちらの調査区も地山まで耕作等による攪乱がおよんでいるところが多く、失われている層もあると思われる。基本的に西区・東区の層位は同じと考えられる。

〔第Ⅰ層〕

第Ⅰ層は耕作等による攪乱層である。細分すると５層に分けられるが、いずれも黒褐色のシルト質砂層である。層の厚さは30～70㎝であり、層中には礫や炭化物・ビニール等が混入している。場所によっては、地山を掘込んでいるところもある。



第２図　調査区位置図

〔第Ⅱ層〕

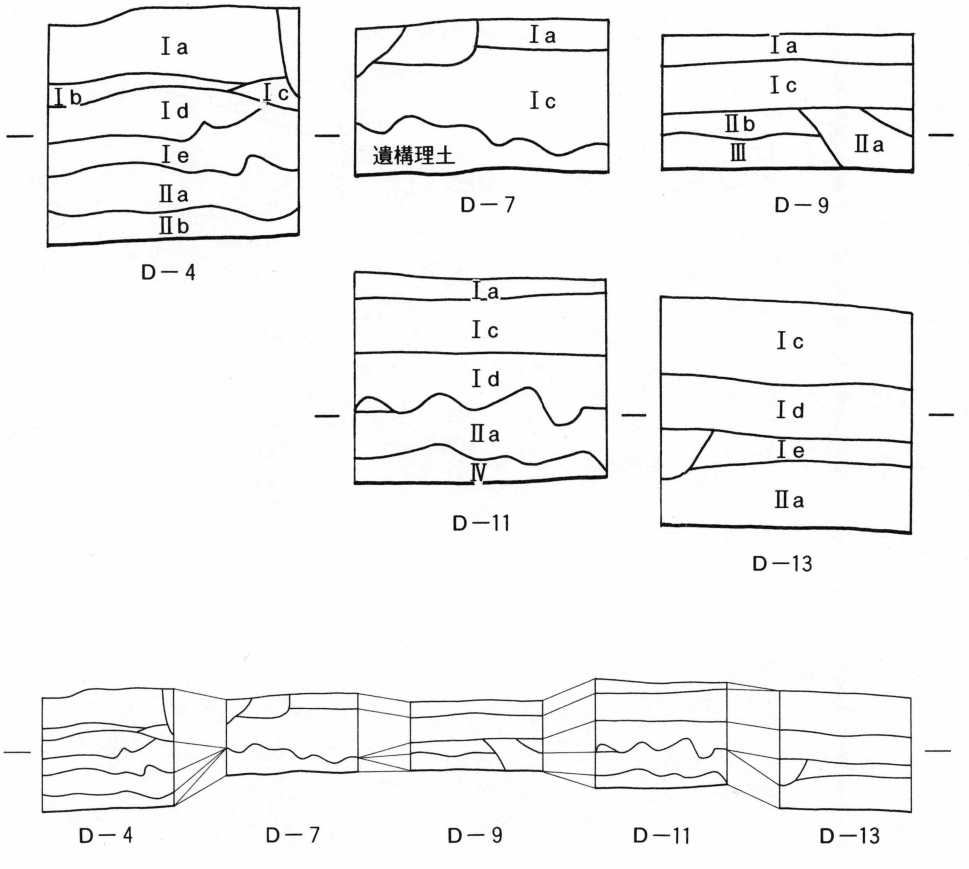
第Ⅱ層は黒褐色・暗褐色砂層である。層の厚さは10㎝前後で、耕作による攪乱で層は途切れている。粘性がややあり、しまりがある。層の残りが良くないので、遺物は検出されなかった。

〔第Ⅲ層〕

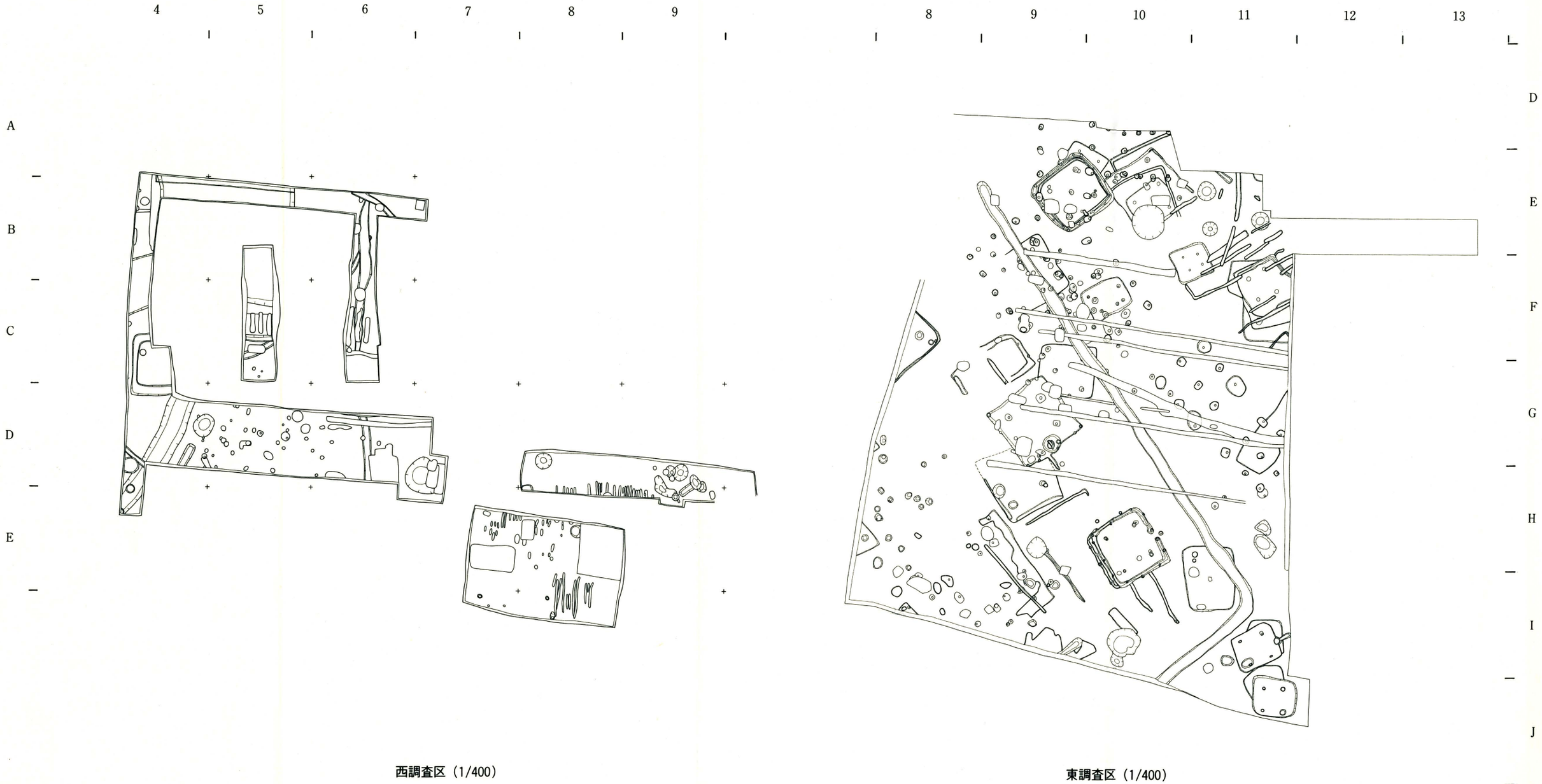
第Ⅲ層は黒褐色・暗褐色シルト質砂層で、にぶい黄褐色砂（地山）を含んでいる。層の厚さは10～40㎝位である。粘性はややあり、しまりもややある。地山面の標高が高いところは耕作等の攪乱で存在しないところがあるが、ほぼ全域にこの層があったと思われる。ほとんどの遺構はこの層から掘込まれているのだが、この層の上面まで攪乱されているところがほとんどであるため、遺構時期の判断はできない。

〔第Ⅳ層〕

第Ⅳ層は灰黄褐色砂層で、酸化鉄、炭化物を含んでいる。層の厚さは約10～18㎝である。粘性・しまりはあまり認められない。この層は西区・東区の両方に見られるが、ともに層としての広がりは大きくない。攪乱によって層が途切れたと思われるが、層の広がりが大きくなく、炭化物を含んでいるので、遺構の埋土の可能性もあると考えられる。



第３図　基本土層柱状図



西調査区（1/400）

東調査区（1/400）

第４図　遺構配置図

2．発見された遺構と出土遺物

今回の調査では、東調査区と西調査区とに調査区を分けて調査を行った。東調査区では、竪穴住居跡が29軒、掘立柱建物跡が７棟、溝跡、土壙、井戸跡、ピットが検出された。竪穴住居は、古墳時代のものが６軒、奈良～平安時代のものが７軒、その他は時期不明である。掘立柱建物跡は、１間×３間のものが２棟、１間×５間以上のものが１棟、２間×２間のものが３棟で、このうち２棟が総柱である。溝跡については、調査区中央に「く」の字状の大きな溝が１条あり、その他に小溝が多数検出された。小溝のうち畝状を呈しているものもある。井戸跡と思われるものは３基確認されており、うち２基で木枠が検出された。遺物は、土師器が塩釜式の複合口縁壺・甕や坏・器台等のほか、国分寺下層式・表杉ノ入式が出土している。須恵器は、溝や住居から坏・甕・壺・蓋等が出土している。その他に土錘や土製品が出土している。

西調査区からは、溝跡や土壙・ピットが検出されたが、住居跡や掘立柱建物等は検出されなかった。土壙のうち大きくて底が不明のものは井戸の可能性もあると思われる。出土遺物は、主に奈良～平安時代の土師器・須恵器である。

第１号住居跡

〔位置〕東調査区南東隅のＨ・Ｉ－12に位置している。

〔重複〕第５号住居跡を切っている。

〔平面形・規模〕北西隅がやや崩壊して張り出しているが、ほぼ隅丸方形を呈している。規模は南北が3.25ｍ、東西3.71ｍである。

〔堆積土〕自然堆積で、４層から成る。堆積土中には多量の炭化物（炭化材）が混入している

〔壁〕壁は床面からやや外側に傾斜しながら立ち上がっている。最大残存高は東壁で約20㎝ある。

〔床面〕地山面を掘込んで床面としている。床面はほぼ平坦である。床面からは炭化物・炭化材が多量に検出されていることから，火災住居と考えられる。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕径22～50㎝、深さ２～10㎝で円形のピット４つが検出され、これらが主柱である。

〔出土遺物〕土師器坏、台付甕が出土している。（塩釜式）

第５号住居跡

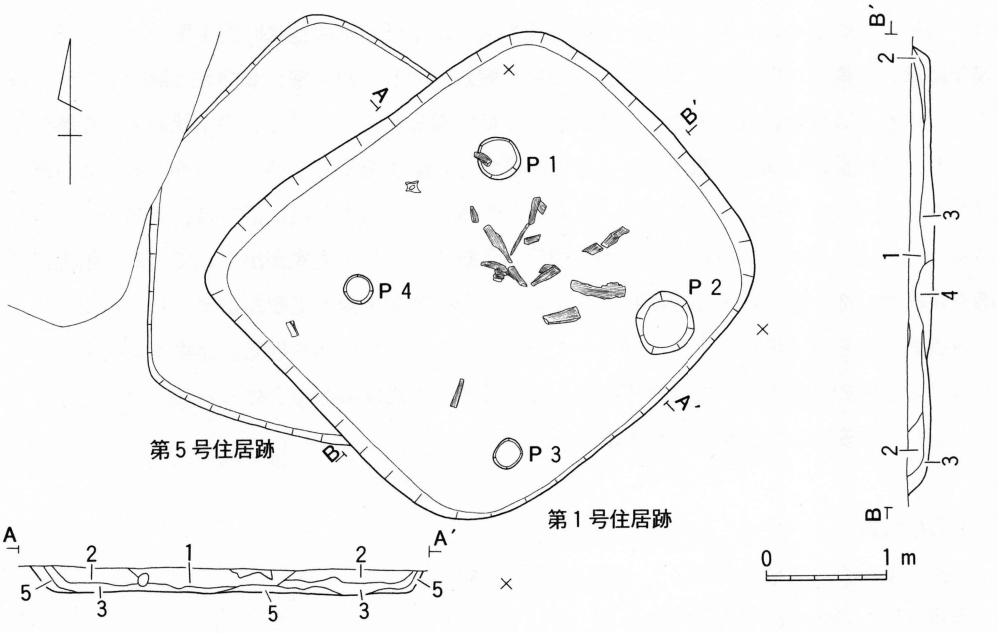
〔位置〕東調査区南東隅でＨ・Ｉ－12に位置している。

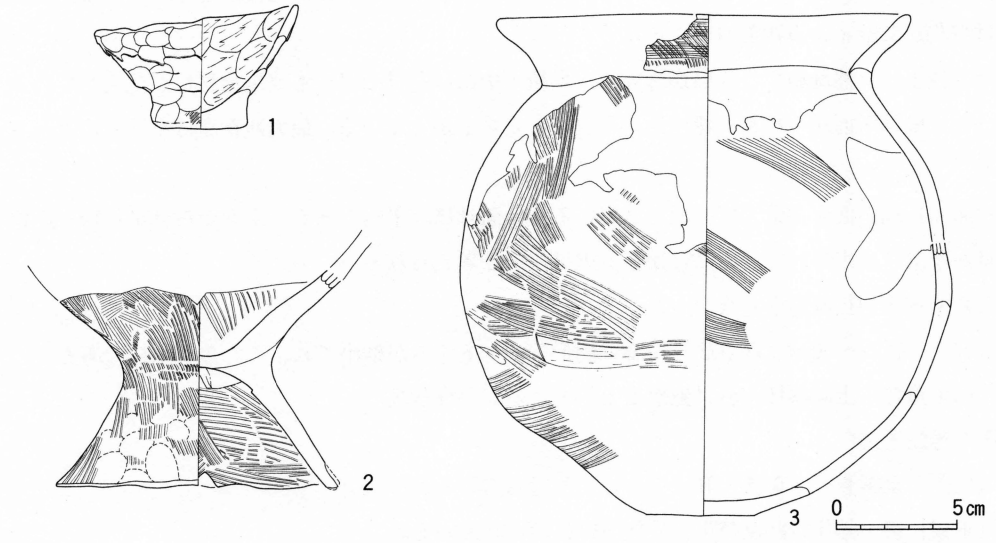
〔重複〕第１号住居跡及び第２号住居跡に切られている。

〔平面形・規模〕東側が第１号住居跡に切られている為、全体の形が分からないが、ほぼ方形を呈していると思われる。規模は南北約3.36ｍ、東西の残存長は約2.03ｍである。

〔堆積土〕削平により堆積土の残りは悪く、１層だけ確認された。地山の土を含む自然堆積土である。

土層No.	土色		土性	粘性	しまり	備考
1層	2.5Y3/1	黒褐	砂	弱	弱	砂質黄褐色粒比較的多く混入
2層	2.5Y2/1	黒	砂	弱	弱	砂質黄褐色粒比較的多く混入
3層	5Y4/2	灰オリーブ	砂	弱	弱	砂質黄褐色小ブロック(1.5～2㎝)を若干混入
4層	10YR1.7/1	黒	シルト質砂	ややあり	弱	炭化材、炭化物を含む
5層	5Y4/4	暗オリーブ	砂	弱	弱	砂質暗褐色ブロックを若干混入





番号	種別	外面調整	内面調整	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版
1	土師器手捏ね	〔口〕指頭押圧　〔底〕ハケメ→指頭押圧	〔口〕ナデ　〔体〕ナデ　〔底〕ナデ	5.2	8.5	3.6		1
2	土師器台付甕	〔底〕ハケメ→ヘラナデ　〔脚台〕指頭押圧→ハケメ	〔底〕ハケメ　〔脚〕ハケメ	(9.1)		11.2	底部～脚台部のみ残存	2
3	土師器甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ　〔胴〕ヘラケズリ→ハケメ	〔胴〕ヘラナデ	20.7	17.2	4.5	1/3欠損	3

第5図　第1号・第5号住居跡・出土遺物

〔壁〕床面からやや外側に傾斜しながら立ち上がる。残存高は北側で約15㎝である。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔出土遺物〕土師器甕（複合口縁）等が出土している。（塩釜式）

第２号住居跡

〔位置〕東調査区南東部で、第１号・５号住居跡の北Ｉ－11・12に位置している。

〔重複〕第４号住居跡・第５号住居跡・第３号土壙を切っている。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸長方形を呈している。規模は南北約3.54ｍ、東西約3.16ｍである。

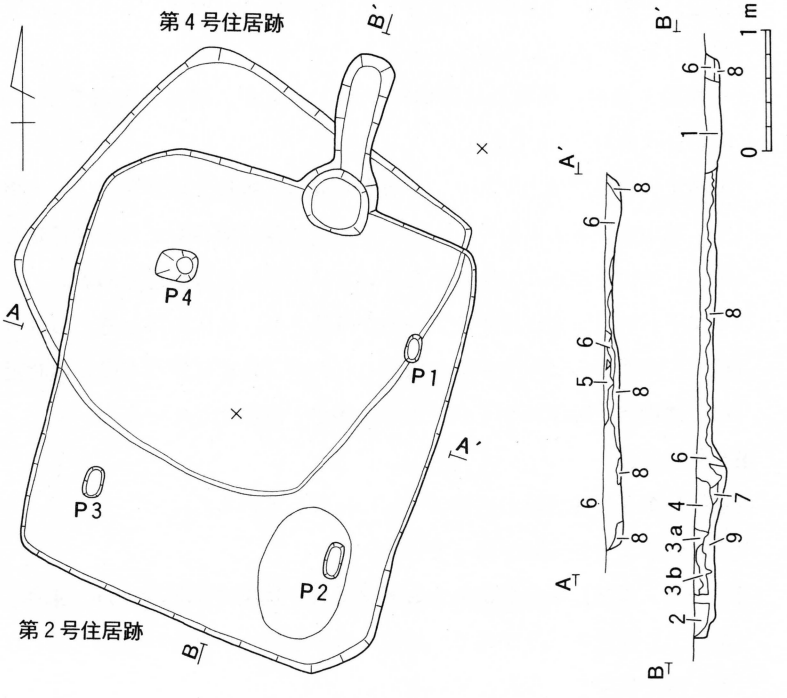
〔堆積土〕自然堆積で、８層から成る。いずれもシルト質砂である。

〔壁〕床面よりほぼ垂直に立ち上がる。残存高は北側で約23㎝である。

〔カマド・炉〕北壁中央やや東側に設置されており、燃焼部と煙道を確認した。

〔柱穴〕床面から４つのピットが検出され、これらが主柱穴と考えられる。北西の柱痕は径14㎝の円形であるが、ほかの３つの柱痕は長軸が24～30㎝、短軸が約15㎝の楕円形を呈している。ピットの深さは４～８㎝である。

〔出土遺物〕土師器の小破片が僅かに出土している。



土層No.	土	色	土 性	粘 性	し ま り	備 考
１層	10ＹＲ２/３	黒褐	シルト質砂	なし	弱	炭化物をごくわずか含む
２層	10ＹＲ２/２	黒褐	シルト質砂	なし	弱	けむり出し穴
３ａ層	10ＹＲ３/４	暗褐	シルト質砂	なし	弱	
３ｂ層	10ＹＲ４/４	褐	シルト質砂	なし	弱	
４層	7.5ＹＲ３/４	暗褐	シルト質砂	弱	弱	土器片焼石を含む
５層	10ＹＲ２/１	黒	シルト質砂	なし	弱	灰化物を少量含む
６層	10ＹＲ２/３	黒褐	シルト質砂	なし	弱	黄褐色砂と灰化物少量含む
７層	10ＹＲ３/３	暗褐	砂	なし	弱	
８層	10ＹＲ５/６	黄褐	砂	なし	弱	地山
９層	2.5ＹＲ５/６	黄褐	砂	なし	弱	地山

第６図　第２号・第４号住居跡

第４号住居跡

〔位置〕東調査区南東部で第１号・第５号住居跡の北側Ｉ－12に位置している。

〔重複〕第２号住居跡に切られている。

〔平面形・規模〕平面形は南側が外に膨らんでいるが、隅丸方形を呈していたと考えられる。規模は南北約3.16ｍ、東西約3.14ｍである。

〔堆積土〕堆積土は１層のみ確認された。地山の土をブロック状に含む自然堆積土と考えられる。

〔壁〕壁はほぼ垂直に立ち上がる。残存高は北壁で約16㎝、東壁で約４㎝である。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔出土遺物〕土師器の小破片が僅かに出土している。

第３号住居跡

〔位置〕東調査区南東部の第２号・第４号住居跡の西Ｈ・Ｉ－11に位置している。

〔重複〕第４号溝に切られている。

〔平面形・規模〕平面形は西側にやや広がるが、隅丸長方形を呈している。規模は南北約4.68ｍ、東西約5.5ｍである。

〔堆積土〕自然堆積土であり、３層から成る。堆積土は砂質で、炭化物を若干含んでいる。

〔壁〕地山を壁としており、床面よりやや外側に傾きながら垂直に立ち上がっている。

〔床面〕地山を掘込んで床面としている。床面はほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕床面ほぼ中央で焼面が確認され、地床炉跡と考えられる。

〔柱穴〕床面からピットが２つ確認されたが、住居に伴うものとは断定できない。

〔出土遺物〕土師器坏が４点、土師器甕が１点出土している。

第６号住居跡

〔位置〕第３号住居跡の西側Ｈ－10に位置している。

〔重複〕第７号住居跡を切っている。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形を呈し、規模は南北約5.0m、東西約5.5mである。

〔堆積土〕住居の残りが悪く、周溝にのみ堆積土が見られる。

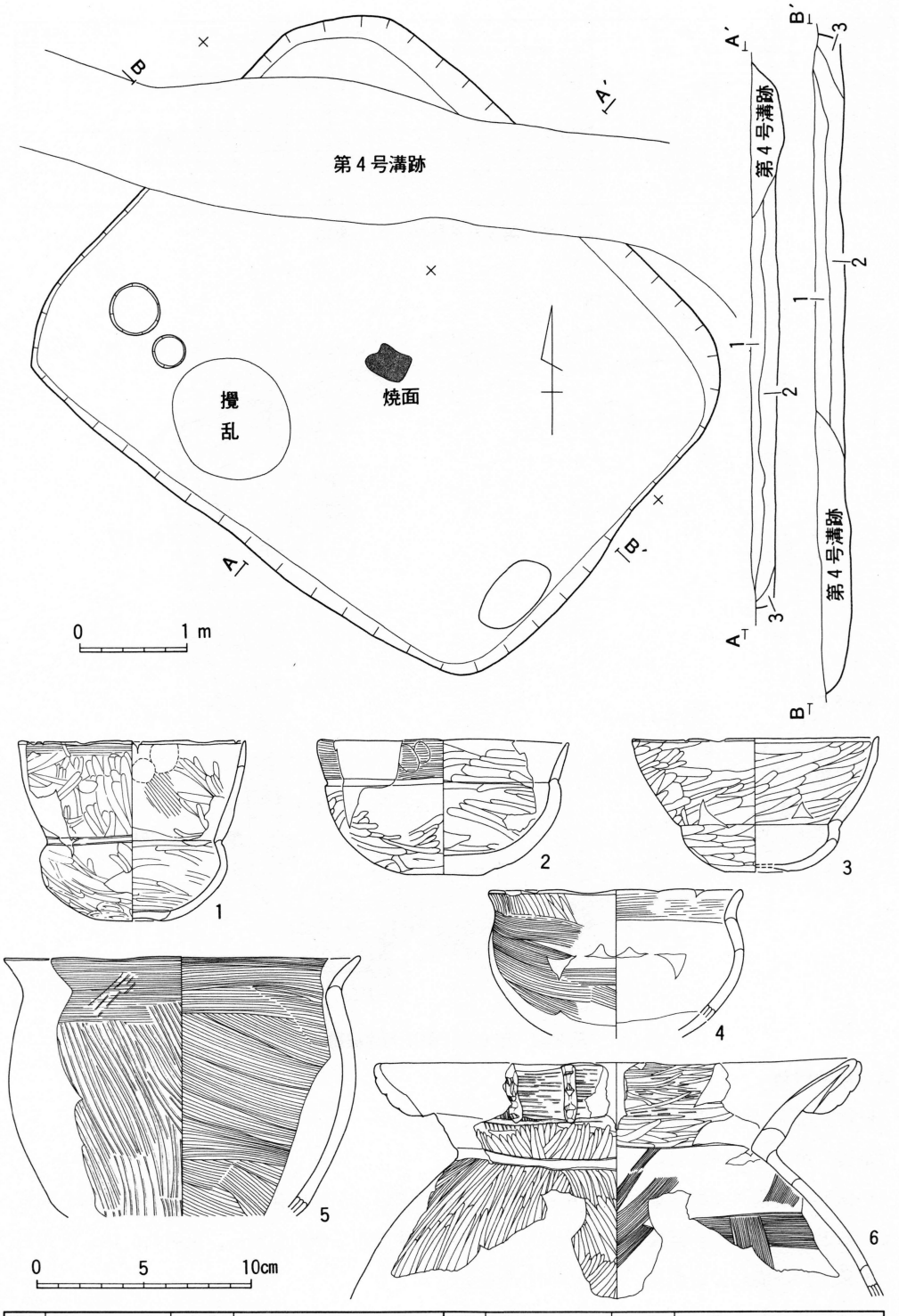
〔壁〕削平により、残存していない。

〔床面〕地山を床としている。

〔カマド・炉〕カマドは確認されなかったが、周溝が北側で一部途切れ、その外側でピットが確認されていることから、ここにカマドがあったと考えられる。

〔柱穴〕床面から径約30～36㎝、深さ約23～27㎝でほぼ円形のピットが４個検出された。また、周溝内から径約14～26㎝、深さ約12～20㎝のほぼ円形のピットが15個検出された。床面の4個のピットは住居の対角線上にあるので主柱穴と考えられる。

〔出土遺物〕土師器、須恵器の小破片が僅かに確認された。

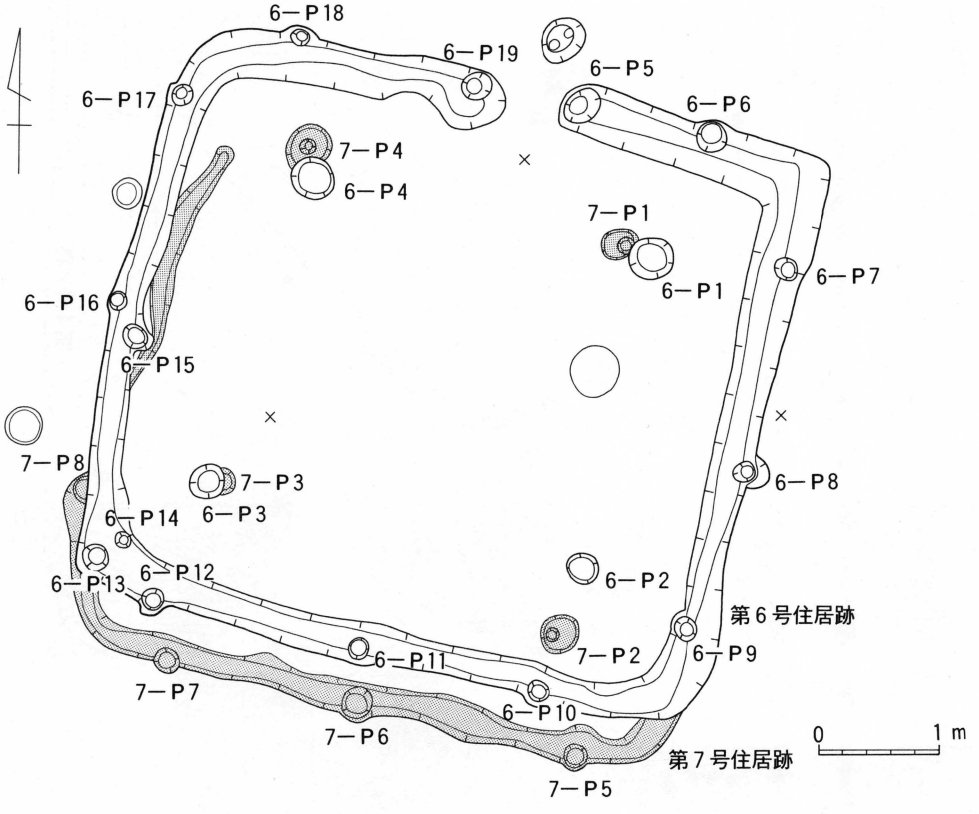


土層No.	土　色	土　性	備　考	土層No.	土　色	土　性	備　考
1層	2.5Y R 4/2　暗灰黄	細粒砂		3層	2.5Y R 5/3　黄褐	細粒砂	
2層	2.5Y R 4/1　黄灰	細粒砂	灰化物を若干含む				

第７図　第３号住居跡・出土遺物

番号	種別	外面調整	内面調整	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版
1	土師器坏	〔口〕ヨコナデ→ミガキ　〔体〕ミガキ 〔底〕ケズリ→ミガキ	〔口〕指頭押圧　〔体〕ヘラナデ→ミガキ 〔底〕ミガキ	8.4	10.6	3.0	1/3欠損	4
2	土師器坏	〔口〕ヨコナデ→指頭押圧　〔体〕ミガキ 〔底〕ケズリ	〔口〕ミガキ　〔体〕ミガキ　〔底〕ミガキ	6.3	11.7	3.6	1/4欠損	5
3	土師器坏	〔口〕ミガキ　〔体〕ミガキ　〔底〕ミガキ	〔口〕ミガキ　〔体〕ミガキ	5.2	11.5	2.9	1/3欠損	7
4	土師器坏	〔口〕ミガキ　〔体〕ヘラナデ	〔口〕ヨコナデ　〔体〕磨滅	(6.9)	11.8	—	2/3欠損（底部欠損）	6
5	土師器甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ　〔胴〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ　〔胴〕ヘラナデ	(12.1)	(16.6)	—	4/5欠損（底部欠損）	8
6	土師器壺	〔口〕ハケメ→棒状浮文＋刻目 〔体〕ミガキ	〔口〕ミガキ　〔体〕ヘラナデ	(11.1)	22.6	—	体部中～底部欠損	9

第7図　第3号住居跡・出土遺物



第8図　第6号・第7号住居跡

第7号住居跡

〔位置〕第3号住居跡の西側H－10に位置している。

〔重複〕第6号住居跡に切られている。

〔平面形・規模〕北壁・東壁が第6号住居に切られているが、残存部から平面形は方形を呈していると考えられる。規模は、南北が欠損して不明確であるが約4.26m、東西約5.18mである。

〔堆積土〕周溝に砂層が見られるのみである。

〔壁〕確認されなかった。

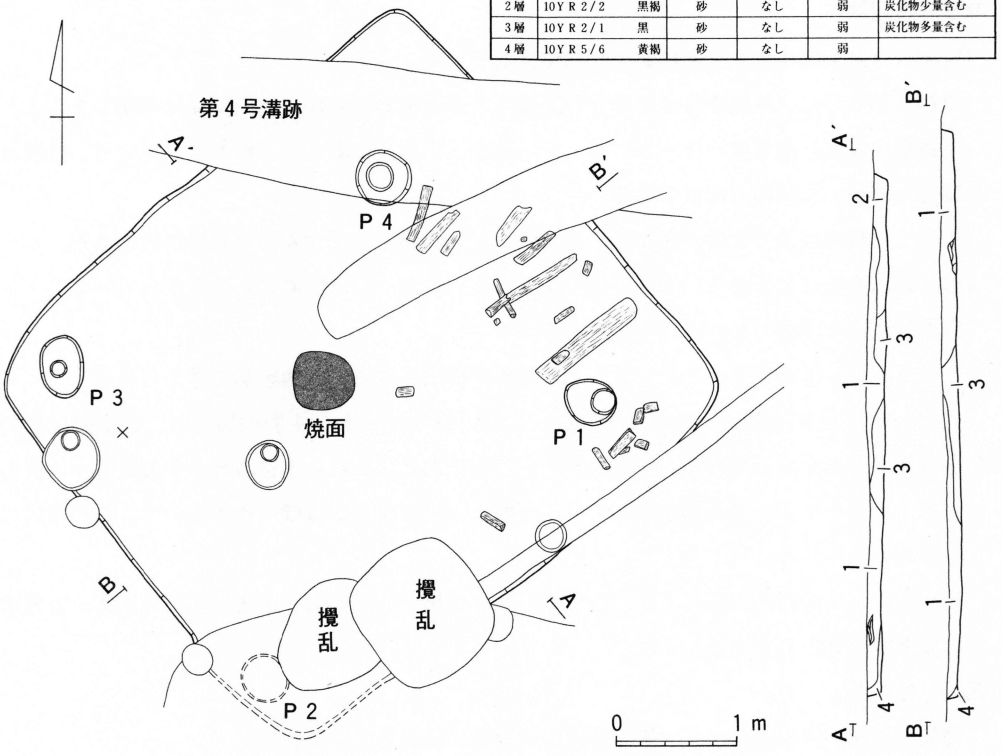
〔床面〕床面は第6号住居に切られて不明である。

〔カマド・炉〕第6号住居に切られて不明である。

〔柱穴〕床面から径約26～40㎝、深さ約22㎝の円形を呈している４個のピットと壁際で径約20～24㎝、深さ約12㎝で円形を呈している４個のピットが確認された。

〔出土遺物〕土師器、須恵器の小破片が僅かに確認されたのみである。

土層No.	土　　色	土　性	粘　性	しまり	備　　考
1層	10YR2/3　黒褐	砂	なし	弱	炭化物少量含む
2層	10YR2/2　黒褐	砂	なし	弱	炭化物少量含む
3層	10YR2/1　黒	砂	なし	弱	炭化物多量含む
4層	10YR5/6　黄褐	砂	なし	弱	



第９図　第８号住居跡

第８号住居跡

〔位置〕東調査区中央のＧ－10付近に位置している。

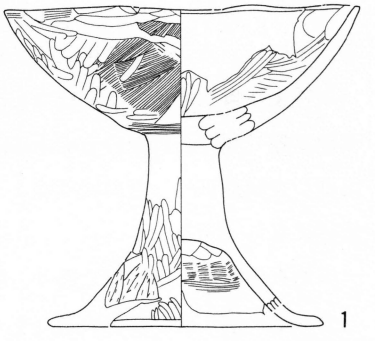
〔重複〕第10号住居跡と第４号溝に切られている。

〔平面形・規模〕南側コーナーおよび南東壁等が住居や撹乱で壊されているが、平面形は隅丸方形を呈している。規模は、長軸約4.82ｍ、短軸約4.38ｍである。

〔堆積土〕自然堆積で、４層から成る。土質は砂で、１～３層中に炭化物および炭化材を含んでいる。

〔壁〕砂質の地山の為やや外側に傾いている所もあるが、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁残存高は７～17㎝である。

〔床面〕地山を床面としている。北東壁際の床面上には炭化材が見られる。



第10図　第８号住居跡出土遺物

番号	種　別	外　面　調　整	内　面　調　整	器高㎝	口径㎝	底径㎝	備　　考	写真図版
1	土師器高坏	〔口〕ミガキ→ヨコナデ　〔坏〕ヘラナデ→ミガキ　〔脚〕ヘラケズリ→ミガキ	〔口〕ナデ　〔坏〕ミガキ　〔脚〕ヘラケズリ、ハケメ	13.4	14.7	11.4	1/5欠損	10

〔カマド・炉〕床面中央よりやや南西に焼土の分布が確認されている。地床炉と考えられる。

〔柱穴〕床面から径約42～44㎝の円形ないし楕円形の４個のピットが確認されている。柱根跡は径約14～22㎝、深さ約22～30㎝の円形を呈している。

〔出土遺物〕土師器の高坏が出土している。

第９号住居跡

〔位置〕東調査区中央やや北側Ｆ－10に位置している。

〔重複〕第５号掘立柱建物跡と切り合い関係にあると思われるが、新旧関係は不明である。

〔平面形・規模〕南東コーナーが欠損しているが、平面形は隅丸長方形を呈している。規模は長軸約3.80ｍ、短軸約3.02ｍである。

〔堆積土〕自然堆積で３層からなり、地山の土と炭化物を若干含んでいる黒色砂である。

〔壁〕地山を壁にしており、一部外側に傾斜しているが、ほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕地山を床面とし、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕床面中央よりやや北西で、焼面が検出されており地床炉と考えられる。

〔柱穴〕床面から径約27～30㎝の円形ないし楕円形のピットが４個検出され、柱痕跡は径約10㎝前後で円形を呈しており、深さは約８～11㎝である。これら４個のピットの位置が住居の対角線上からややずれて台形を呈しているが埋土、規模などがほぼ一致するので、この住居の主柱穴と考えられる。

〔出土遺物〕土師器坏、高坏、甕、台付甕、甑等が出土している。遺物は北東コーナーと地床炉の脇南側に集中している。

第10号住居跡

〔位置〕東調査区中央Ｇ－９で第８号住居の南側に位置している。

〔重複〕第８号住居および第11号住居を切っている。

〔平面形・規模〕北西コーナーが攪乱等でやや乱れているが、平面形はほぼ正方形を呈している。規模は、東西および南北共に約5.70ｍである。

〔堆積土〕自然堆積で、５層から成る。床面上の堆積土の残りは悪く、カマドとカマドのある東側壁際で観察されたのみである。

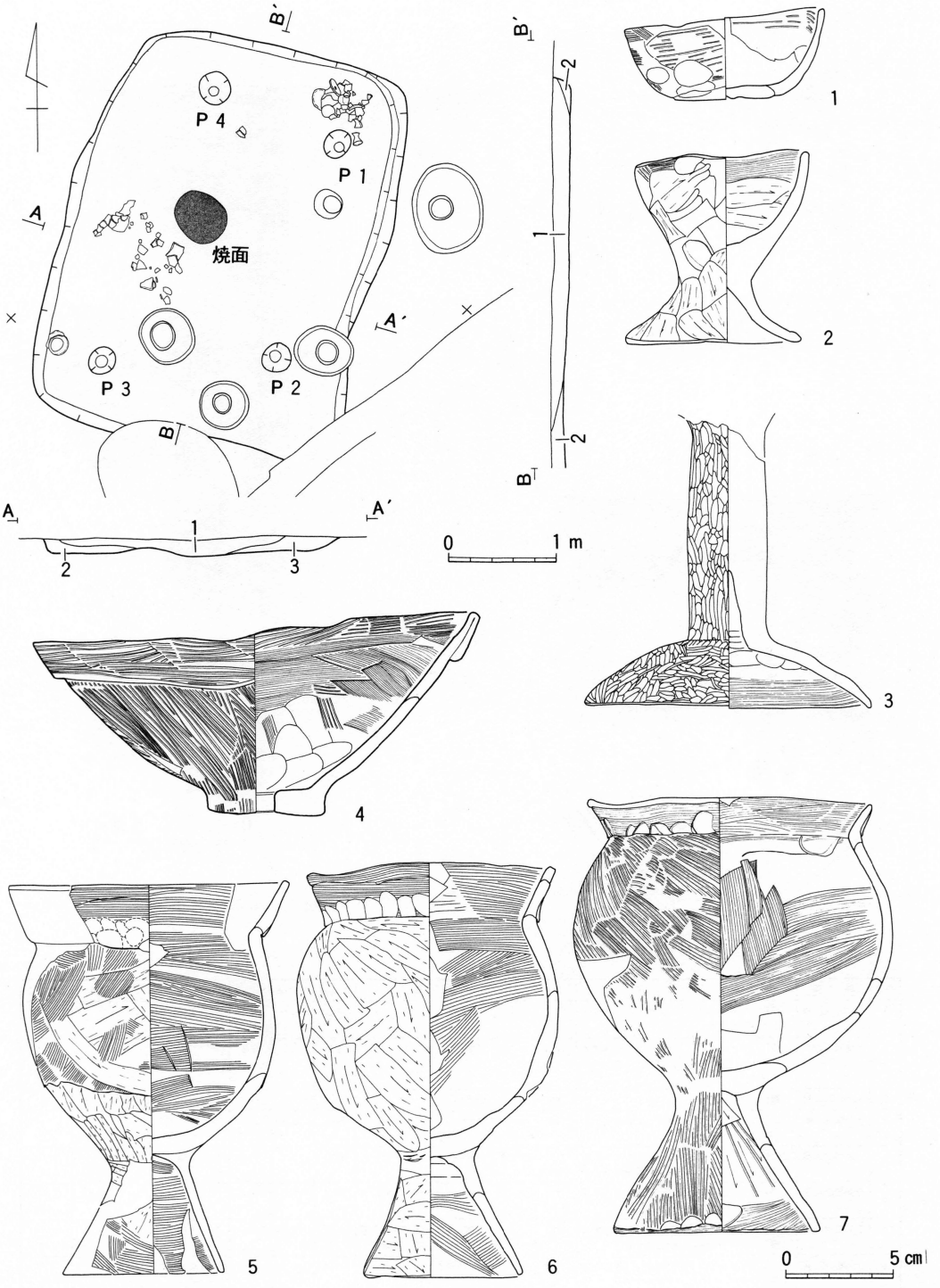
〔壁〕東側壁以外の壁の残りは１～３㎝と悪く、東壁は約15㎝である。壁はやや外傾してから垂直に立ち上がる。

〔床面〕床面はほぼ平坦であり、壁際で周溝は検出されなかった。

〔カマド・炉〕東壁の中央よりやや南側で確認された。カマド周辺の壁は外側に張り出し、煙道が延びている。また、袖脇の床面および壁際にそれぞれ１対のピットが見られる。

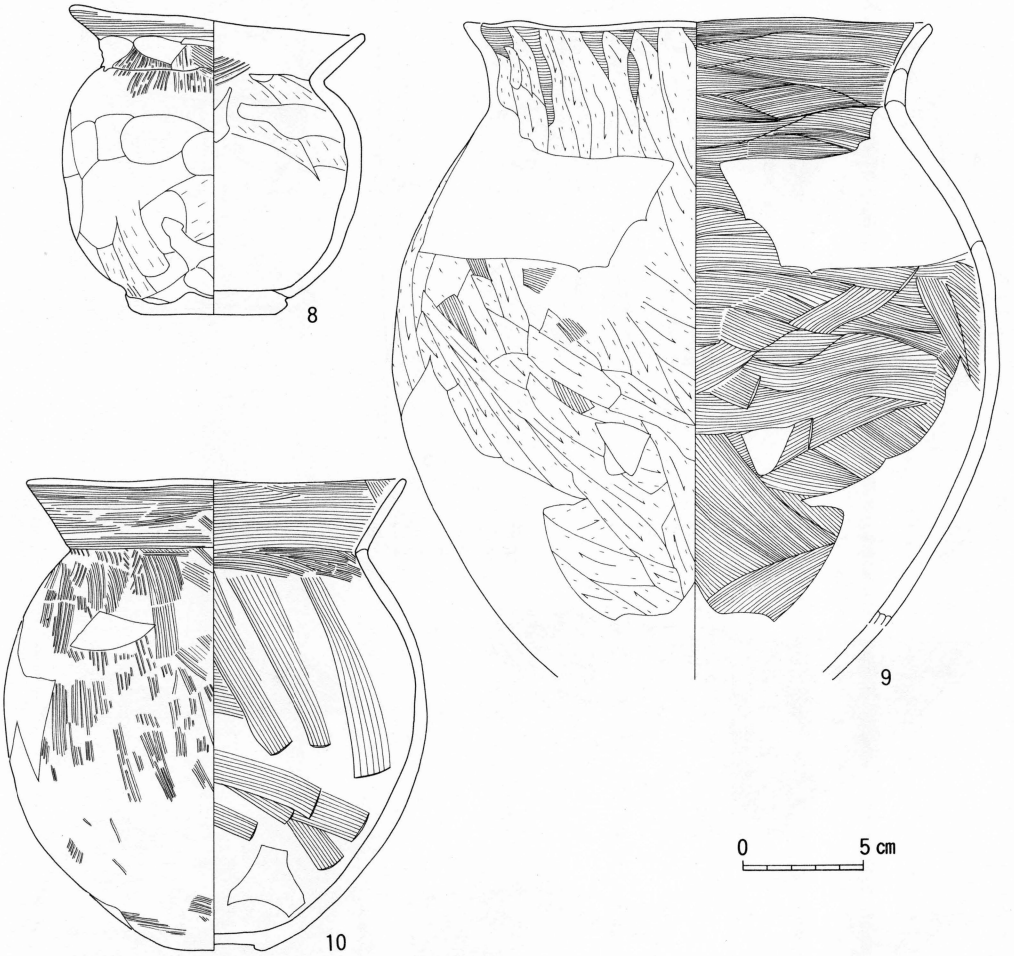
〔柱穴〕床面上で５個のピットが検出され、壁際で10個のピットが検出された。床面上のうち住居の対角線上にある３個のピットが主柱と考えられる。柱穴は一辺が46～75㎝の方形ないし楕円形を呈しており、柱根跡は径約20㎝の円形で、深さは23～36㎝である。

〔出土遺物〕土師器甕、須恵器坏、甕の小破片が僅かに検出された。



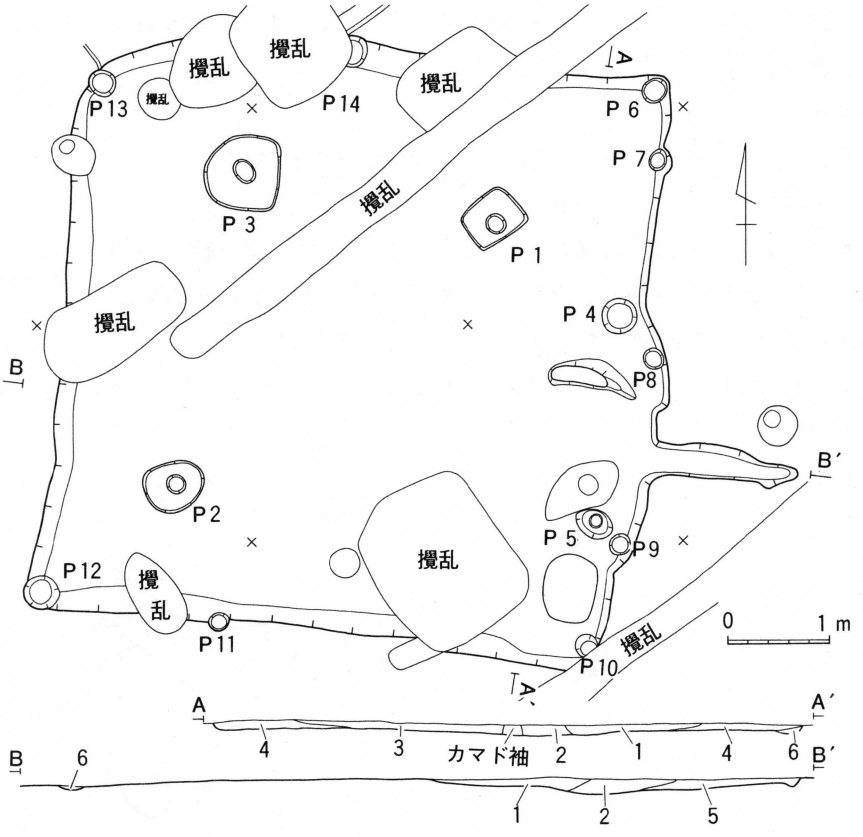
土層No.	土	色	土 性	備 考
1層	10YR2/2	黒	砂	地山の土を全体に若干含む、炭を微量含む
2層	10YR3/3	暗褐	砂	地山の土を全体に大量にブロック状に含む、炭を若干含む
3層	10YR2/1	黒	砂	地山の土を全体に若干含む

第11図　第９号住居跡・出土遺物



番号	種別	外面調整	内面調整	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版
1	土師器坏	〔口〕ハケメ→ヘラナデ　〔体〕ハケメ→ヘラナデ→指頭押圧	〔口〕ハケメ	4.2	9.3	4.1	1/5欠損	11
2	土師器手捏ね	〔口〕ハケメ→ナデ→ミガキ　〔体〕ヘラケズリ→ナデ→ミガキ→指頭押圧　〔脚〕ヘラケズリ	〔口〕ヨコナデ　〔体〕ヘラケズリ	9.0	8.1	8.2		13
3	土師器高坏	〔脚〕ミガキ	〔脚〕ナデ→ヨコナデ	(13.3)		13.3	1/2欠損（坏部欠損）	14
4	土師器甑	〔口〕ハケメ　〔体〕ハケメ　〔底〕ハケメ	〔口〕ハケメ→ヨコナデ　〔体〕ナデ→ハケメ→ヘラナデ　〔底〕ナデ	9.4	20.8	5.5		12
5	土師器台付甕	〔口〕ヨコナデ→指頭押圧　〔胴〕ヘラケズリ→ヘラナデ　〔脚〕ヘラケズリ→ヘラナデ	〔口〕ヨコナデ　〔胴〕ヘラナデ　〔脚〕ヘラナデ	18.2	13.1	7.5	1/2欠損	17
6	土師器台付甕	〔口〕ヨコナデ→指頭押圧　〔胴〕ヘラケズリ　〔脚〕ヘラケズリ	〔口〕ヨコナデ　〔胴〕ヘラナデ　〔脚〕ヘラナデ	19.3	11.5	7.4		16
7	土師器台付甕	〔口〕ヨコナデ→指頭押圧　〔胴〕ハケメ　〔脚〕ハケメ→指頭押圧→ヨコナデ	〔口〕ヨコナデ　〔胴〕ヘラケズリ→指頭押圧　〔脚〕ヘラケズリ→ヨコナデ→指頭押圧	20.2	13.2	9.6	1/5欠損	18
8	土師器甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ→ナデ　〔胴〕ヘラケズリ→ナデ　〔底〕ハケメ→ナデ	〔口〕ハケメ　〔胴〕ヘラナデ	12.7	12.3	5.6	1/4欠損	15
9	土師器甕	〔口〕ヨコナデ　〔胴〕ハケメ→ヘラナデ→ミガキ　〔底〕ハケメ	〔口〕ヨコナデ　〔胴〕ヘラナデ	19.5	15.8	—	1/3欠損	22
10	土師器甕	〔口〕ヨコナデ　〔胴〕ハケメ→ヘラナデ→ミガキ　〔底〕ナデ	〔口〕ヨコナデ　〔胴〕ハケメ→ヘラナデ	19.5	10.8	4.2	1/4欠損	21

第12図　第9号住居跡出土遺物



土層No.	土　　色	土 性	備　　考	
1層	10YR3/1　黒褐	砂	炭を微量含む	〔カマド内崩落土〕
2層	10YR2/3　黒褐	砂	炭・焼土を粒で全体に若干含む。地山の土を若干含む	〔カマド内崩落土〕
3層	10YR3/2　黒褐	砂	地山の土若干含む	〔住居内堆積土〕
4層	10YR4/2　灰黄褐	砂	地山の土を全体に大量にブロック状に含む	〔住居内堆積土〕
5層	10YR4/4　褐	砂	地山の土を全体に大量にブロック状に含む	〔煙道内堆積土〕
6層	10YR4/3　にぶい黄褐	砂		〔周溝内堆積土〕

第13図　第10号住居跡

第11号住居跡

〔位置〕東調査区中央H－9で第10号住居跡の南側に位置している。

〔重複〕第10号住居に切られている。

〔平面形・規模〕南壁の西1/4と西壁および北壁の西1/2が削平や住居の切り合いで不明であるが、隅丸長方形を呈していると考えられる。規模は南北約5.36m、東西残存長約4.34mで推定約6.04mである。

〔堆積土〕自然堆積で、4層から成る。堆積土は、砂で黒褐色土を含んでいる。

〔壁〕地山を壁としており、東壁と北壁1/2、南壁1/4が残存している。壁はやや外側に傾きながら立ち上がっている。

〔床面〕地山を床面としている。西側がはっきりしていないが、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕北東部にピットが切り合って2個検出している。新しいほうが、住居の主柱と考えら

れる。柱穴は短軸約32cm、長軸約42cmの楕円形を呈し、深さは約29cmである。

〔出土遺物〕土師器甕・壺が出土している。

第12号住居跡

〔位置〕東調査区南H・I－9に位置し、地山面で確認されている。

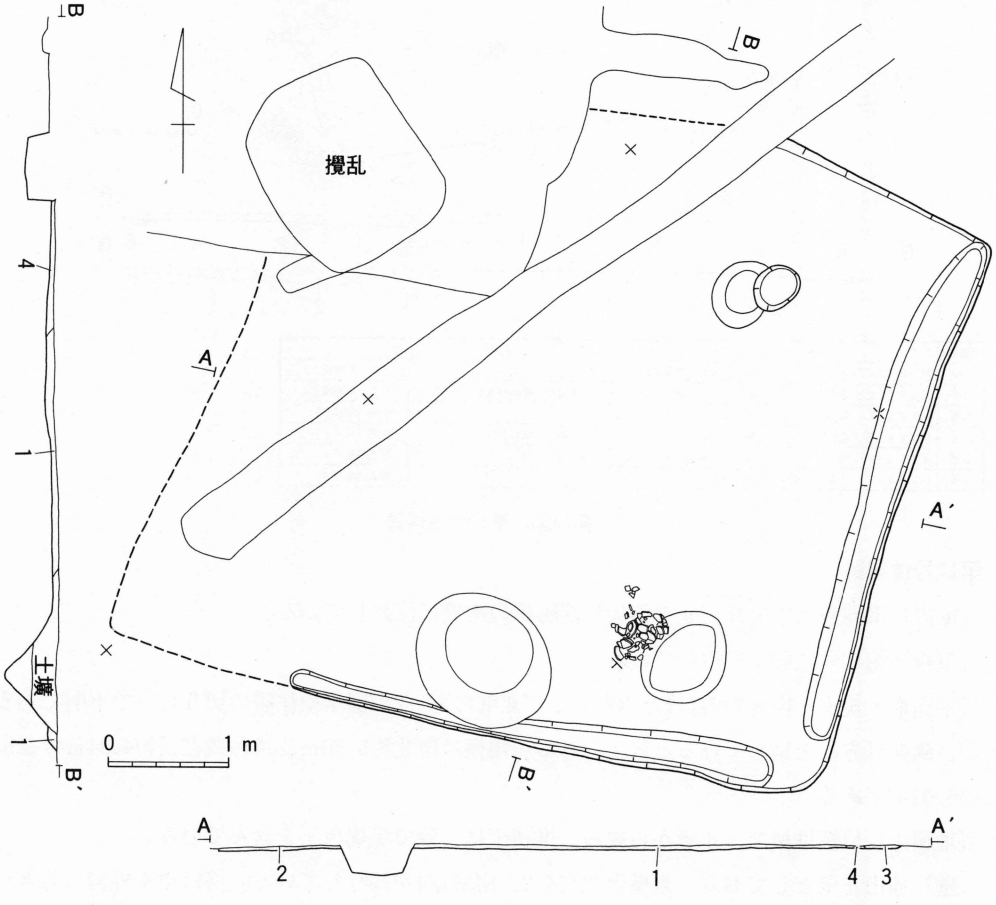
〔重複〕第15号土壙に切られている。

〔平面形・規模〕削平により北側の一部しか残っていないが、平面形は方形を呈していると考えられる。規模は東西約8.96m、南北は残りが悪く残存長は約3.44mである。

〔堆積土〕住居の堆積土の残りは悪く、北側に3層確認された。

〔壁〕北側と北東および北西コーナー付近が僅かに残存している。壁は1～9cm残存し、やや外傾しながら立ち上がっている。

〔床面〕削平により不明瞭である。



土層No.	土　　色	土 性	粘　性	しまり	備　　考
1層	10YR4/3　にぶい黄褐	砂	なし	なし	炭混入　黒褐色土混入
2層	7.5YR5/6　明褐	砂	なし	なし	炭混入　黒褐色土混入
3層	7.5YR5/2　灰褐	砂	なし	なし	炭混入　黒褐色土混入
4層	10YR4/4　褐	砂	なし	なし	

第14図　第11号住居跡

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕住居の範囲がはっきりしないので、断定できないが住居の対角線上にのると思われるピットが4個あり、一辺が46～100cmと幅があるが、柱根跡の径約18cmでピットの間隔もほぼ等しいので、これらが主柱と考えられる。また、この他に壁際に小ピットが見られる。

〔出土遺物〕検出されなかった。

第13号住居跡

〔位置〕東調査区北西部F－9に位置し、地山面で確認された。

〔重複〕第4号掘立柱建物および第4号溝に切られている。

〔平面形・規模〕南側が削平により不明であるが、残存部分からほぼ方形を呈していると考えられる。規模は東西約5.24m、南北残存長約3.90mである。

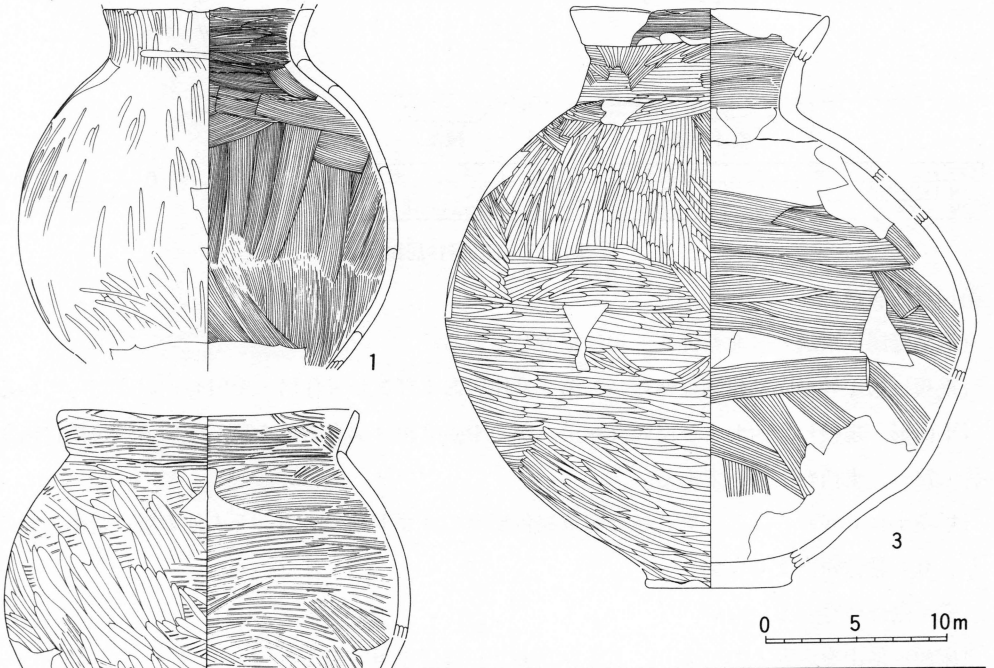
〔堆積土〕削平により残りが悪く、2層確認されたのみである。いずれも黒褐色砂である。

〔壁〕壁残存最大高は北壁で、約6cmである。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕南側が不明瞭であるが、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕住居の対角線上と思われるところに短軸約32cm、長軸約36cmの楕円形を呈したピット

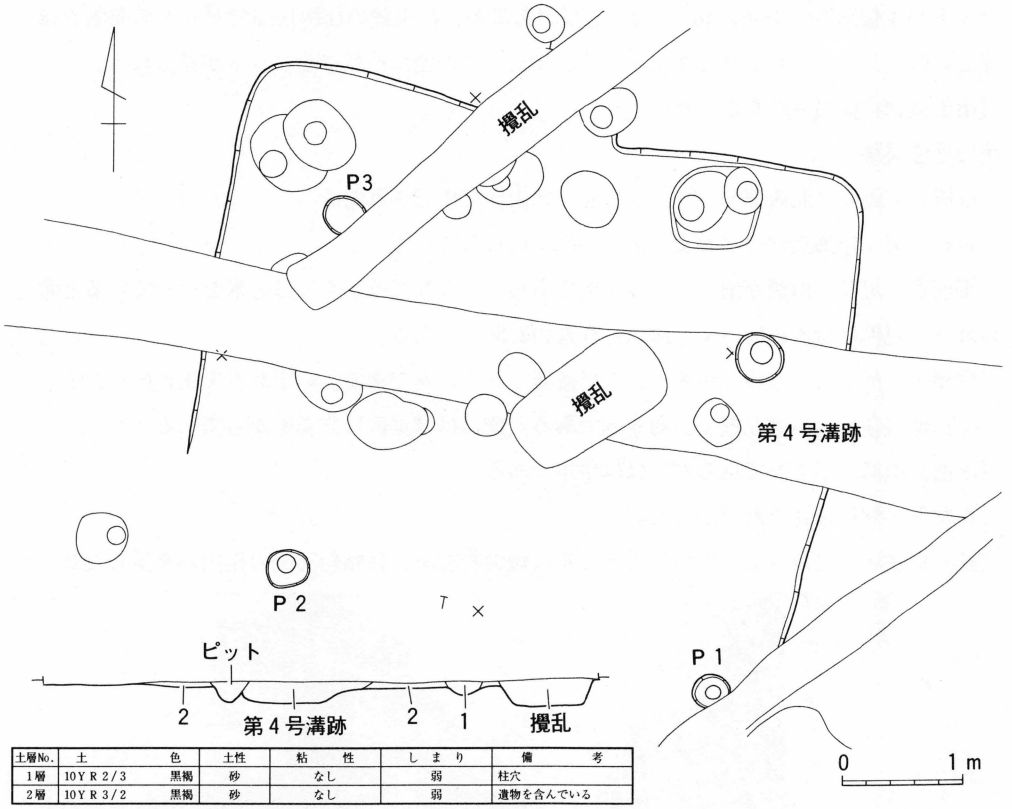


番号	種別	外面調整	内面調整	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版
1	土師器壺	〔頸〕ミガキ 〔胴〕ミガキ	〔頸〕ヘラナデ 〔胴〕ヘラナデ	(20.0)	—	—	口縁部、胴下半～底部欠損	23
2	土師器甕	〔口〕ハケメ 〔胴〕ハケメ→ミガキ	〔口〕ハケメ 〔胴〕ハケメ	(22.3)	16.6	—	2/3欠損(底部欠損)	24
3	土師器壺	〔口〕ヨコナデ→指頭押圧 〔頸〕ミガキ 〔胴〕ミガキ 〔底〕ミガキ	〔口〕ヨコナデ 〔頸〕ヘラナデ 〔胴〕ヘラナデ	32.0	14.3	7.7		25

第15図　第11号住居跡出土遺物

が３個あり、これらが主柱と考えられる。残りの１個は検出されなかった。

〔出土遺物〕土師器の小破片が僅かに確認されたのみである。



土層No.	土色	土性	粘性	しまり	備考
1層	10ＹＲ２/３ 黒褐	砂	なし	弱	柱穴
2層	10ＹＲ３/２ 黒褐	砂	なし	弱	遺物を含んでいる

第16図　第13号住居跡

第14号住居跡

〔遺構確認〕東調査区北西部Ｅ－10に位置している。

〔重複〕第１号掘立柱建物に切られ、第５号住居および第19号住居・第21号住居を切っている。

〔平面形・規模〕北西および南西コーナーがやや張り出す隅丸方形を呈している。規模は南北約5.74ｍ、東西約5.70ｍである。

〔堆積土〕６層から成る。第３層は明黄褐色粘土のカマド袖である。その他の層は暗褐色砂でしまり・粘性があまりない。

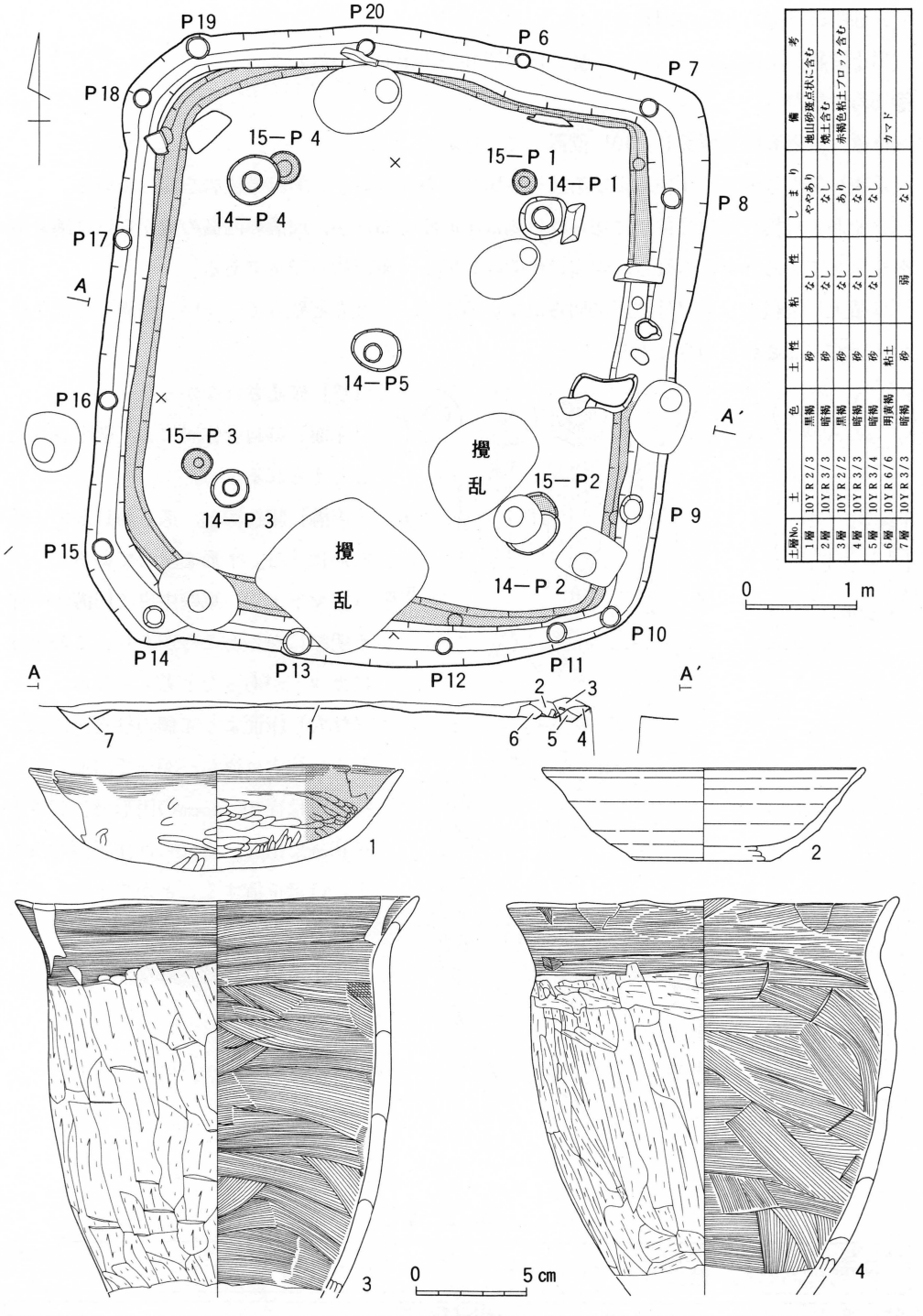
〔壁〕壁は残存していない。

〔床面〕地山を床面としており、しまりがあり、ほぼ平坦である。

〔周溝〕幅約40㎝、深さ約20㎝あり、断面形は「Ｕ」字形を呈している。

〔カマド・炉〕東壁のほぼ中央にカマドの袖が残存している。煙道は第１号掘立柱建物跡に切られている。

〔柱穴〕床面上で５個、壁際で15個のピットが確認された。床面上のピットは住居の対角線上に位置していることから主柱と考えられる。柱穴は短軸約33～43㎝、長軸約36～50㎝の楕円形



土層No.	土色	土性	粘性	しまり	備考
1層	10YR 2/3 黒褐	砂	なし	ややあり	地山砂斑点状に含む
2層	10YR 3/3 暗褐	砂	なし	なし	焼土含む
3層	10YR 2/2 黒褐	砂	なし	あり	赤褐色粘土ブロック含む
4層	10YR 3/3 暗褐	砂	なし	なし	
5層	10YR 3/4 暗褐	砂	なし	なし	
6層	10YR 6/6 明黄褐	粘土			カマド
7層	10YR 3/3 暗褐	砂	弱	なし	

番号	種別	外面調整	内面調整	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版
1	土師器坏	[口]ヨコナデ 〔体〕ミガキ 〔底〕ミガキ	[口]ヨコナデ〔体〕ミガキ→黒色処理〔底〕ミガキ→黒色処理	4.7	17.0	4.0	1/2欠損	33
2	須恵器坏	[口]ロクロナデ 〔体〕ロクロナデ	[口]ロクロナデ 〔体〕ロクロナデ 〔底〕ロクロナデ	4.2	(14.7)	(6.1)	2/3欠損（底部欠損）	34
3	土師器甕	[口]ヨコナデ 〔胴〕ヘラケズリ	[口]ヨコナデ 〔胴〕ヘラナデ	(18.2)	18.3	—	1/4欠損（底部欠損）	35
4	土師器甕	[口]ヨコナデ→ヘラナデ 〔胴〕ヘラケズリ	[口]ヨコナデ→ヘラナデ 〔胴〕ヘラナデ	(17.0)	17.8	—	2/5欠損（底部欠損）	36

第17図　第14・15号住居跡・出土遺物

で、柱根跡は径約20cmの円形を呈している。

〔出土遺物〕土師器丸底内黒坏・甕・須恵器坏が出土している。

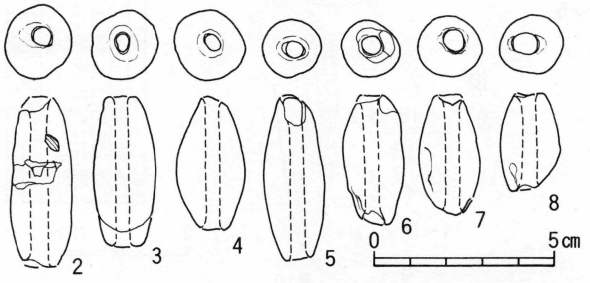
第15号住居跡

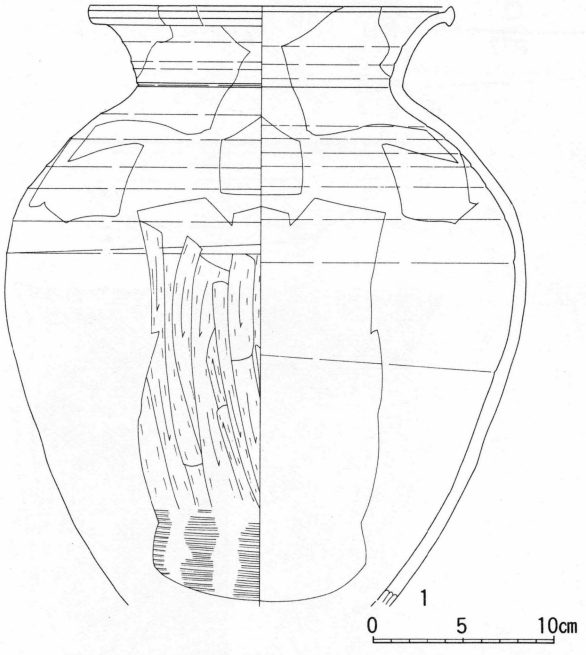
〔位置〕東調査区北西部E－10に位置している。

〔重複〕第1号掘立柱建物および第14号住居に切られており、第21号住居を切っている。

〔平面形・規模〕第14号住居に切られ外側は不明瞭であるが、周溝の内側の線からほぼ隅丸方形を呈していると考えられる。規模は南北約4.90m、東西約4.52mである。

〔堆積土〕堆積土は第14号住居に切られているため、ほとんど残っていない。周溝に黒褐色砂の1層が確認されるのみである。





〔壁〕確認されなかった。

〔床面〕第14号住居により削平されたと考えられる。

〔周溝〕幅約30cm、深さ約11cmで、断面形は「U」字形を呈している。

〔カマド・炉〕東壁中央で周溝が一部不明瞭になるところがあり、この部分にカマドがあったと考えられる。

〔柱穴〕床面より4個の柱穴が確認された。柱穴は径24～30cmで円形を呈し、柱根跡は径10～16cmの円形で、深さ7～10cmである。これらは住居の対角線上にほぼ位置することから主柱と考えられる。

〔出土遺物〕確認されなかった。

番号	種別	外面調整	内面調整	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版
1	須恵器甕	〔口〕ロクロナデ 〔胴上〕ロクロナデ 〔胴下〕ヘラケズリ、平行タタキ	〔口〕ロクロナデ 〔胴〕ロクロナデ	(32.8)	(20.3)	—	4/5欠損	37

番号	種別	特徴	写真図版	番号	種別	特徴	写真図版
2	土錘	〔長さ〕4.6 〔内径〕0.5 〔外径〕1.6 糸痕あり	29	3	土錘	〔長さ〕4.1 〔内径〕0.5 〔外径〕1.7	26
4	土錘	〔長さ〕3.7 〔内径〕0.5 〔外径〕1.9	27	5	土錘	〔長さ〕4.5 〔内径〕0.5 〔外径〕1.7	28
6	土錘	〔長さ〕3.5 〔内径〕0.5 〔外径〕1.7	30	7	土錘	〔長さ〕3.3 〔内径〕0.6 〔外径〕1.7	31
8	土錘	〔長さ〕2.7 〔内径〕0.6 〔外径〕1.6	32				

第18図　第14号住居跡出土遺物

第16号住居跡

〔位置〕東調査区北東部Ｆ－11に位置している。

〔重複〕溝に切られている。

〔平面形・規模〕平面形は隅丸方形を呈している。規模は南北約3.06ｍ、東西約2.88ｍである。

〔堆積土〕堆積土の残りは悪く、２層のみ確認された。自然堆積で黒褐色・褐色の砂で黄褐色砂をブロック状に含んでいる。また、土器片も含んでいる。

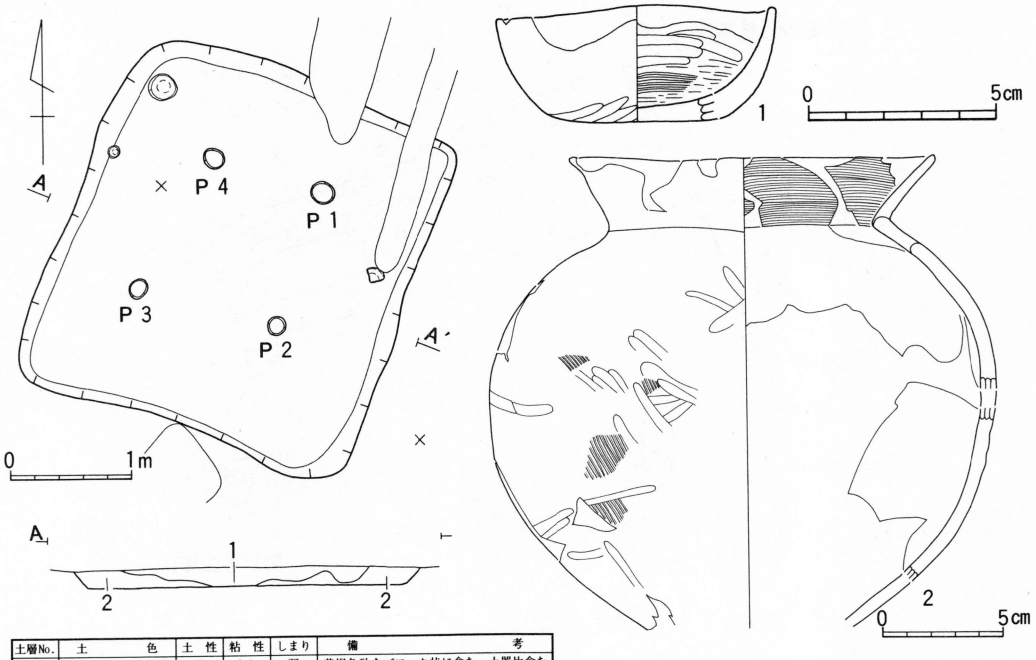
〔壁〕地山を壁としており、やや外側に傾斜しながら立ち上がっている。壁の残存高は、11～19cmである。

〔床面〕地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕床面より４個のピットが確認され、これらは住居の対角線上に位置していることから主柱と考えられる。ピットはいずれも円形を呈しており、径16～20cm、深さ約３cmである。

〔出土遺物〕土師器坏・甕が出土している。遺物は北西部の壁際と東側壁際からといずれも壁際からの出土である。



土層No.	土色	土性	粘性	しまり	備考
1層	10YR 2/2 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色砂をブロック状に含む　土器片含む
2層	10YR 4/4 褐	砂	なし	弱	遺物を含む（地山より赤味が強い）

番号	種別	外面調整	内面調整	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版
1	土師器坏	〔底〕ミガキ	〔体〕ミガキ　〔底〕ナデ→ヘラナデ	3.1	7.4	4	1/3欠損	38
2	土師器甕	〔胴〕ハケメ→ミガキ	〔口〕ヨコナデ	19.5	15.1	—	1/4欠損	39

第19図　第16号住居跡・出土遺物

第17号住居跡

〔位置〕東調査区北部Ｆ－11・12に位置している。

〔重複〕第18号・第22号・第23号住居を切っており、溝に切られている。

〔平面形・規模〕南東コーナー付近が溝等に切られており不明であるが、残存部から方形を呈していると考えられる。規模は南北約4.30ｍ、東西約4.04ｍである。

〔堆積土〕自然堆積で、５層から成る。土層は褐色・黒褐色砂で粘性がなく酸化鉄を含んでいる。

〔壁〕地山および住居埋土を壁としており、外側にやや傾斜しながら立ち上がっている。壁の残存高は、３～５㎝である。

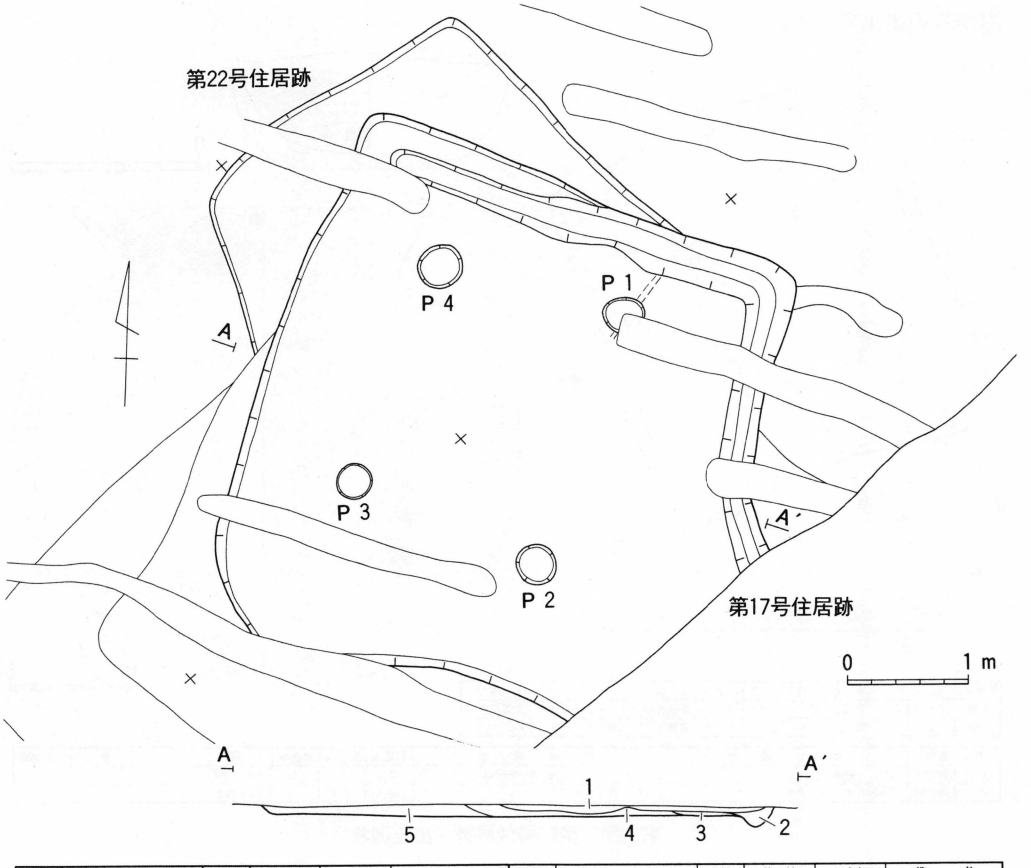
〔床面〕地山および住居埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。

〔周溝〕幅約26㎝、深さ約８㎝である。周溝は北壁および東壁のみで確認された。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕床面から４個のピットが確認され、これらはほぼ住居の対角線上にあることから主柱穴と考えられる。ピットはいずれも円形を呈しており、径30～36㎝、深さは約４㎝である。

〔出土遺物〕土師器甕・須恵器坏・甕が出土している。いずれも小破片である。



土層No.	土　　色	土性	粘　性	しまり	備　　考	土層No.	土　　色	土性	粘　性	しまり	備　　考
1層	10Ｙ Ｒ 3／1　黒褐	砂	なし	弱	酸化鉄含む	4層	10Ｙ Ｒ 3／1　黒褐	砂	なし	弱	酸化鉄含む
2層	10Ｙ Ｒ 4／3　にぶい黄褐	砂	なし	弱	酸化鉄含む（少量）	5層	10Ｙ Ｒ 2／1　黒	砂	なし	弱	酸化鉄含む
3層	10Ｙ Ｒ 4／4　褐	砂	なし	弱	酸化鉄含む（少量）						

第20図　第17号・第22号住居跡

第22号住居跡

〔位置〕東調査区北部Ｆ－11に位置している。

〔重複〕第18号住居に切られている。

〔平面形・規模〕住居の南部は他の遺構に切られており不明である。また、西側がやや外側に広がっている。規模は南北約2.90ｍ、東西約2.66ｍである。

〔堆積土〕他の遺構により削平されているため、暗褐色砂層が１層確認されたのみである。

〔壁〕地山を壁としている。残存高は４～８㎝であり、ほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔出土遺物〕検出されなかった。

第18号住居跡

〔位置〕東調査区北東部Ｆ－11・12に位置している。

〔重複〕第17号住居に切られており、第22号・第23号住居を切っている。

〔平面形・規模〕東側が調査区外で未堀のため不明であるが、ほぼ方形を呈していると考えられる。規模は東側の範囲が不明であり、東西の残存長は約4.38ｍ、南北約4.66ｍである。

〔堆積土〕自然堆積で、堆積土は暗褐色砂・明褐色砂・黄褐色砂から成る。３・４層では灰白色砂を斑点状に含む。また、４層には炭化物・遺物を含んでいる。

〔壁〕地山および住居埋土を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁の残存高は３～14㎝である。

〔床面〕地山および住居埋土を床面としている。床面はほぼ平坦である。床面上には遺物および炭化材が見られる。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕北西および南西コーナー付近からそれぞれピットが１個確認された。柱穴は短軸40～52㎝、長軸47～60㎝の楕円形を呈し、柱根跡は径17～23㎝の円形で深さ約11㎝である。

〔出土遺物〕土師器甕・甑・土錘・不明土製品が出土している。また、北と東側で壁に沿って、炭化材が平行に並んだ状態で出土している。

第23号住居跡

〔位置〕東調査区北部Ｆ－11・12に位置している。

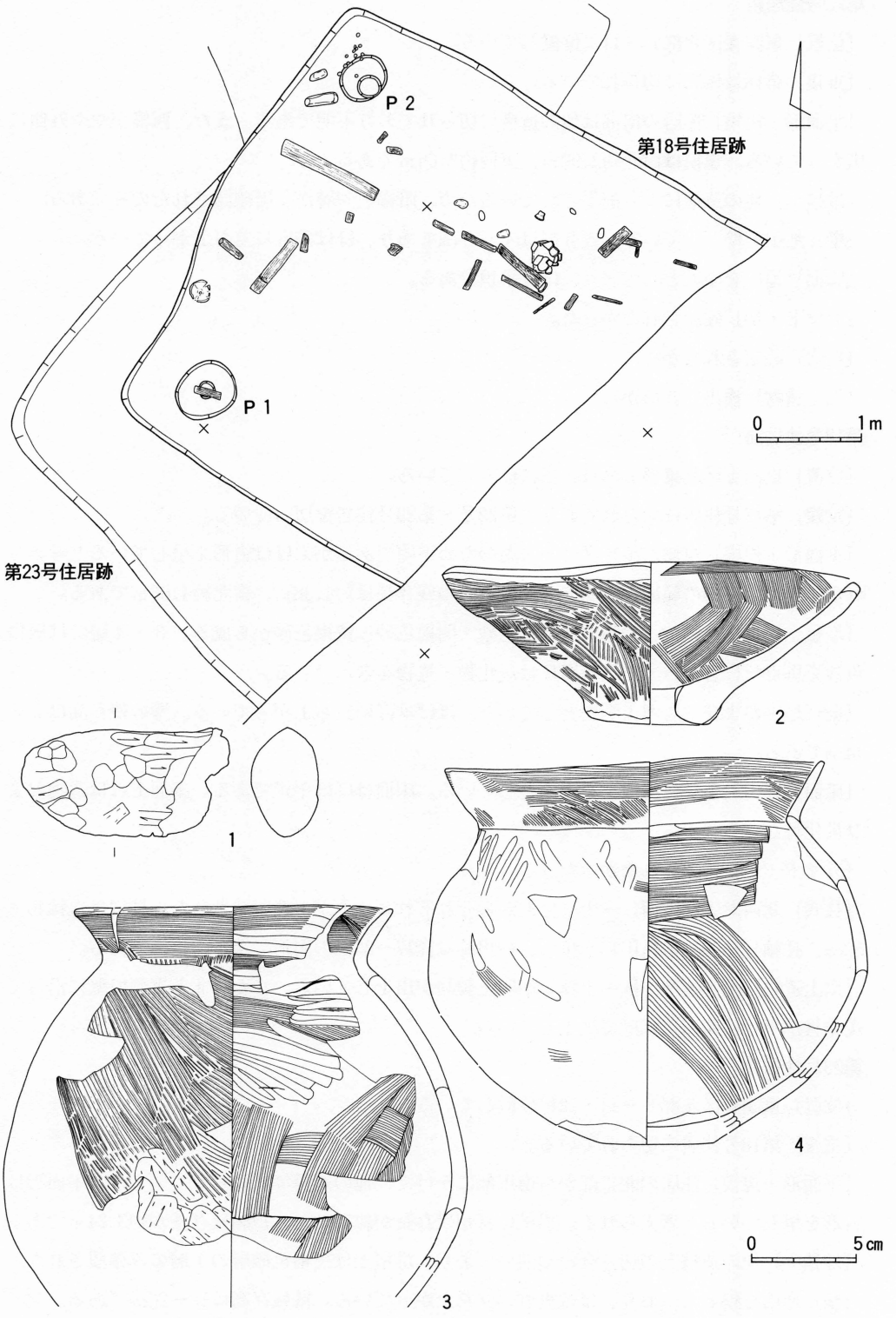
〔重複〕第18号住居に切られている。

〔平面形・規模〕住居の北東部から南東部にかけて、他の遺構等に切られているが、平面形は方形を呈していると考えられる。規模は長軸残存長が約3.70ｍ、短軸残存長が約3.24ｍである。

〔堆積土〕他の遺構との切り合いや削平により、堆積土は黒褐色砂層の１層のみ確認された。

〔壁〕地山を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁残存高は18～26㎝である。

〔床面〕地山を床面としており、ほぼ平坦である。



第21図　第18号・第23号住居跡・出土遺物

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔出土遺物〕検出されなかった。

第19号住居跡

〔位置〕東調査区北西部Ｅ－11・12に位置している。

〔重複〕第６号・第７号掘立柱建物および第14号住居、第11号土壙に切られており、第20号住居を切っている。

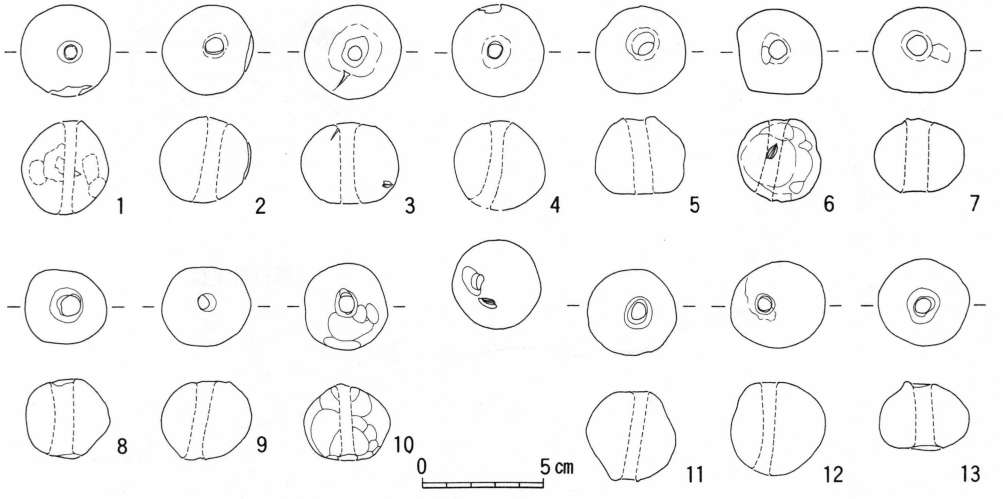
〔平面形・規模〕住居南側が他の遺構に切られているため不明瞭であり、またやや北西部が広がるが方形を呈していたと考えられる。規模は南北約5.44ｍ、東西約5.62ｍである。

〔堆積土〕堆積土は削平により僅かしか残存していない。堆積土は暗褐色砂が１層確認されたのみである。

〔壁〕壁の残存高は３～11㎝であり、ほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕地山および住居埋土を床面としている。

〔周溝〕周溝は東壁側全体と北壁側の一部で確認された。幅は約28㎝で、深さが約17㎝である。



番号	種別	特　　徴	写真図版
1	不明土製品	ヘラケズリ→指頭押圧　〔長さ〕(10.0)　〔幅〕5.2　〔厚〕3.2	41

番号	種別	外　面　調　整	内　面　調　整	器高㎝	口径㎝	底径㎝	備　　考	写真図版
2	土師器甑	〔口〕ハケメ　〔体〕ハケメ	〔口〕ヘラナデ　〔体〕ヘラナデ	7.8	20.0	5.6		40
3	土師器甕	〔口〕ヨコナデ　〔頸〕ハケメ　〔胴上〕ハケメ　〔胴下〕ヘラケズリ	〔口〕ヨコナデ→ミガキ　〔胴上〕ヘラナデ→ミガキ　〔胴下〕ヘラナデ	(19.2)	15.2	—	1/3残存	56
4	土師器甕	〔口〕ヨコナデ→ヘラナデ　〔胴上〕ヘラナデ、ミガキ　〔胴下〕ヘラナデ、ミガキ	〔口〕ヨコナデ→ヘラナデ　〔胴上〕ヘラナデ　〔胴下〕ヘラナデ	18.4	18.1	5.2	1/5欠損	55

番号	種別	特　　徴	写真図版	番号	種別	特　　徴	写真図版
1	土錘	〔長さ〕3.9　〔内径〕0.5　〔外径〕3.8　指頭押圧	49	2	土錘	〔長さ〕3.6　〔内径〕0.7　〔外径〕3.8	44
3	土錘	〔長さ〕3.4　〔内径〕0.6　〔外径〕4.0　糸痕あり	48	4	土錘	〔長さ〕3.7　〔内径〕0.5　〔外径〕3.8　糸痕あり	46
5	土錘	〔長さ〕3.2　〔内径〕0.7　〔外径〕3.8	47	6	土錘	〔長さ〕3.3　〔内径〕0.8　〔外径〕3.7　指頭押圧　糸痕あり	42
7	土錘	〔長さ〕3.1　〔内径〕0.9　〔外径〕3.9	43	8	土錘	〔長さ〕3.3　〔内径〕0.8　〔外径〕3.4	45
9	土錘	〔長さ〕3.3　〔内径〕0.6　〔外径〕3.7	50	10	土錘	〔長さ〕3.2　〔内径〕0.5　〔外径〕3.6　指頭押圧	52
11	土錘	〔長さ〕3.3　〔内径〕0.5　〔外径〕3.7	54	12	土錘	〔長さ〕3.9　〔内径〕0.5　〔外径〕4.0	51
13	土錘	〔長さ〕2.9　〔内径〕0.7　〔外径〕3.8	53				

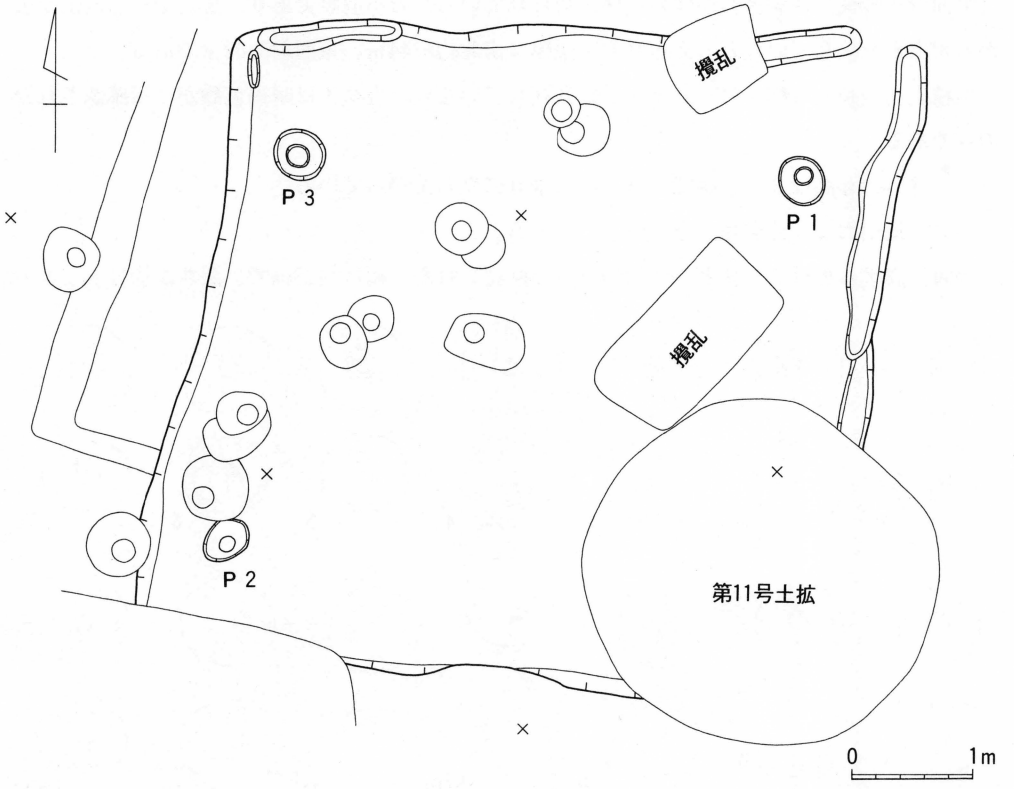
第22図　第18号住居跡出土遺物

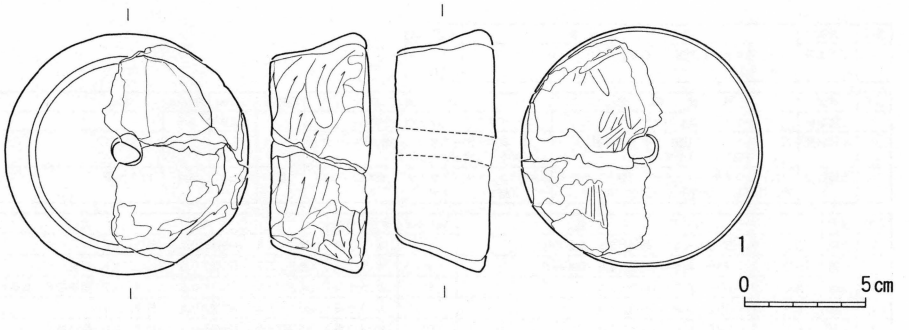
断面形は「U」字形を呈している。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕床面より３個のピットが検出された。これらのピットは住居の対角線上に位置することから主柱と考えられる。残りの１個は第11号土壙に切られている。柱穴は短軸33～41㎝、長軸42～44㎝の楕円形で、柱根跡は径14～19㎝の円形を呈しており、深さは５～11㎝である。

〔出土遺物〕土製紡錘車が出土している。その他に土師器・須恵器の小破片が出土している。





番号	種別	特	徴	写真図版
1	紡錘車	〔側面〕ナデ	〔裏面〕ミガキ　〔内径〕1.1　〔外径〕(10.1)	57

第23図　第19号住居跡・出土遺物

第20号住居跡

〔位置〕東調査区北西部Ｅ－11・12に位置している。

〔重複〕第６号・第７号掘立柱建物および第19号住居、第11号土壙、溝に切られている。

〔平面形・規模〕住居南部は他の遺構に切られているため不明であるが、残存部から隅丸方形を呈していると考えられる。住居東側は溝の影響を受けて広がった思われる。

〔堆積土〕他の遺構に切られているため残りは悪く、暗褐色砂で黄褐色の地山の土を含んでいる１層のみ確認された。

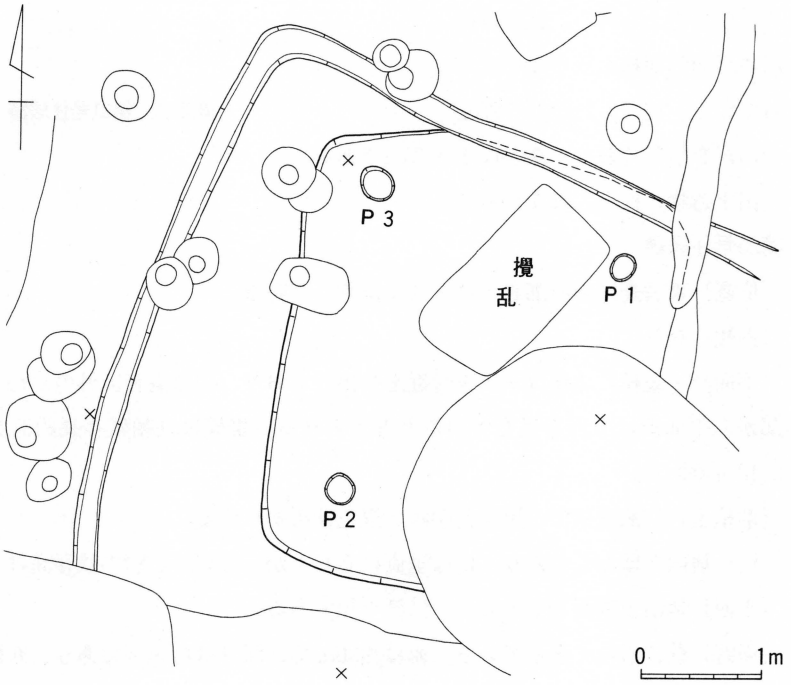
〔壁〕壁は住居の南部1/２が他の遺構により削平されている。残存している壁高は２～７㎝であり、ほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕地山を床面としている。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕床面より３個のピットが検出され、住居の対角線上に位置することから、これらが主柱と考えられる。柱穴は短軸20～26㎝、長軸24～32㎝の楕円形を呈しており、深さは３～８㎝である。１個は第11号土壙に切られている。

〔出土遺物〕検出されなかった。



第24図　第20号住居跡

第21号住居跡

〔位置〕東調査区北西部Ｅ－10に位置している。

〔重複〕第１号掘立柱建物および第14号・第15号住居に切られている。

〔平面形・規模〕平面形は西から東に向かってやや広がっているが、ほぼ隅丸方形を呈している。規模は南北約3.54ｍ、東西約3.10ｍである。

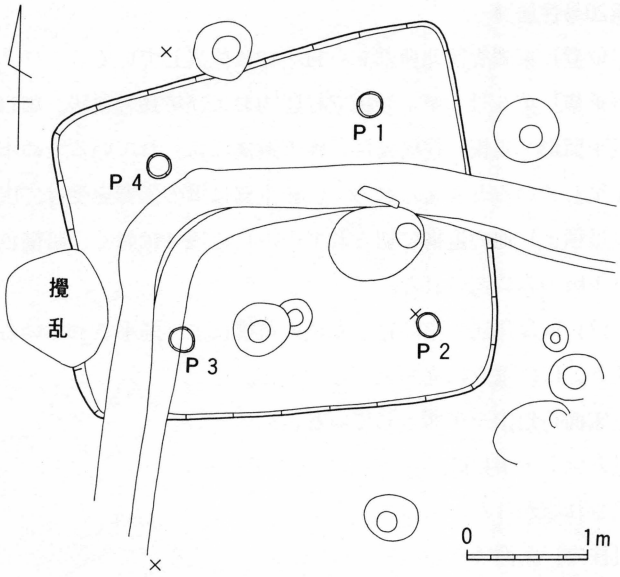
〔堆積土〕他の遺構によって削平されており、堆積土の残りは悪い。暗褐色砂が確認されたのみである。

〔壁〕地山を壁にしている。壁残存高は4～11cmと残りは悪い。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

〔床面〕地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕床面より4個のピットが検出されており、住居の対角線上にほぼ位置していることから主柱と考えられる。柱穴は住居の平面形同様東側がやや広がっている。柱穴は径が21～22cmの円形を呈しており、深さは4～7cmである。



第25図　第21号住居跡

〔出土遺物〕検出されなかった。

第26号住居跡

〔位置〕東調査区南西部F・G－8に位置している。

〔重複〕なし

〔平面形・規模〕北東コーナー付近を検出しており、他は調査区外のため未調査である。残存部から平面形は方形を呈していると考えられる。規模は長軸残存長約3.20m、短軸残存長約2.18mである。

〔堆積土〕自然堆積で、黒褐色砂層と褐色砂層から成る。

〔壁〕地山を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁の残存高は5～12cmである。

〔床面〕地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔周溝〕壁に沿って巡っている。幅は約26cmで、深さは約8cmであり、断面形は「U」字形を呈している。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕北東コーナー付近の床面上で2個のピットが検出されているが、住居に伴うものか断定できない。また周溝内からもピットを1個検出している。

〔出土遺物〕土師器・須恵器の小破片が僅かに検出されたのみである。

第28号住居跡

〔位置〕東調査区西部G－9で、第10号住居と第26号住居の間に位置している。

〔重複〕第29号住居を切っている。

〔平面形・規模〕西側の一部と東側が削平により不明であるが、南西コーナーが残存しており

ほぼ長方形を呈していると考えられる。規模は長軸は削平により全長が不明であるが残存長は約4.12mであり、短軸は約3.64mである。

〔堆積土〕黒褐色砂層が1層確認されたのみである。

〔壁〕地山を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がっている。壁の残存高は約6cmである。

〔床面〕地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔周溝〕北壁および南壁の一部に沿ってあり、幅は約38cmで、深さが約5cmである。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔出土遺物〕検出されなかった。

第29号住居跡

〔位置〕東調査区西部G－9で、第28号住居の北側に位置している。

〔重複〕第28号住居に切られている。

〔平面形・規模〕住居南部が第28号住居に切られ全体の形は不明である。また北西コーナーの外側が不整形であるが、平面形は方形を呈していたと考えられる。規模は東西約3.80mで、南北残存長約2.86mである。

〔堆積土〕暗褐色砂層の1層が確認されたのみである。

〔壁〕壁の残りは約2cmとあまり良くない。地山を壁としており、ほぼ垂直に立ち上がると考えられる。

〔床面〕地山を床面としており、ほぼ平坦である。

〔周溝〕残存部壁沿いにみられる。幅は38～58cmと幅が広く、深さは約6cmである。

〔カマド・炉〕確認されなかった。

〔柱穴〕確認されなかった。

〔出土遺物〕検出されなかった。

3．掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡

〔位置〕東調査区北西部D・E－9・10に位置している。

〔重複〕第14・15・21号住居を切っている。

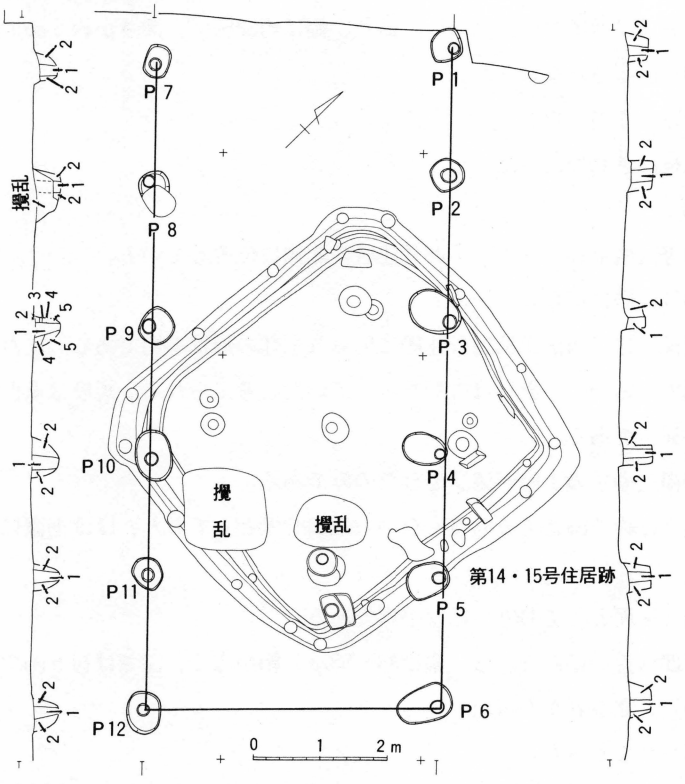
〔規模〕桁行5間以上、梁行1間の東西棟である。桁行は北側柱列の総長9.72m、南側柱列の総長9.52m、柱間は北側柱列で1.90、2.14、1.96、1.82、1.90m、南側柱列で1.72、2.14、1.96、1.70、2.00mである。梁行は西側柱列の柱間は4.44m、東側柱列の柱間は4.42mである。梁行の柱間が桁行の柱間の2倍以上あるので、西側・東側柱列の中間付近を何度も精査したが柱穴は検出することはできなかった。

〔柱穴〕柱穴は楕円形を呈しているものもあるが、隅丸方形ないし長方形を呈していたと考えられる。短軸が38～60cm、長軸が50～80cmである。柱根跡はいずれも円形で、径は14～24cm、

深さが36～51cmである。

〔埋土〕埋土はいずれも黒褐色砂層で黄褐色砂を含んでいるものと黒褐色砂層で遺物や炭化物粒を僅かに含んでいるものの２層からなる。

〔出土遺物〕土師器・須恵器の小破片が検出されている。土師器はロクロ使用のものがある。須恵器坏は回転糸切り底である。



土層No.	土色	土性	粘性	しまり	備考
P7－1層	10YR3/1 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色土粒及び炭化物粒を含む
2層	10YR3/2 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色砂を帯状に含む
P8－1層	10YR2/2 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色砂を斑点状に含む
2層	10YR3/2 黒褐	砂	なし	弱	
P9－1層	10YR2/2 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む
2層	10YR3/2 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色土含む
3層	10YR2/2 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色土砂
4層	10YR5/6 黄褐	砂	なし	弱	黒褐色土わずかに含む
5層	2.5YR5/6 黄褐	砂	なし	弱	黒褐色土わずかに含む
P10－1層	10YR2/2 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色シルト質粘土を斑点状に含む　遺物を含む
2層	10YR2/3 黒褐	砂	なし	弱	
P11－1層	10YR2/3 黒褐	砂	なし	弱	にぶい黄褐色シルト質粘土をブロック状に含む、小石を含む
2層	10YR2/2 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色砂を斑点状に含む
P12－1層	10YR2/3 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色砂を斑点状に含む、炭化物を含む
2層	10YR2/2 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色砂を斑点状に含む、小石もわずかに含む

土層No.	土色	土性	粘性	しまり	備考
P1－1層	10YR2/2 黒褐	シルト質砂	弱	弱	黄褐色質シルト砂を斑点状に含む、小石を含む
2層	10YR3/1 黒褐	砂	弱	弱	黄褐色砂をわずかに含む
P2－1層	10YR2/2 黒褐	シルト質砂	弱	弱	炭化物をわずかに含む
2層	10YR3/1 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色砂を含む
P3－1層	10YR2/2 黒褐	砂	なし	弱	炭化物をわずかに含む、黄褐色砂もわずかに含む
P3－2層	10YR3/1 黒褐	砂	なし	弱	黄褐色砂をしもふり状に含む、遺物も含む
P4－1層	10YR2/2 黒褐	シルト質砂	弱	弱	炭化物、小石をわずかに含む、遺物も含む
2層	10YR2/1 黒	シルト質砂	弱	弱	黄褐色砂を斑点状にわずかに含む
P5－1層	10YR2/2 黒褐	シルト質砂	弱	弱	炭化物、小石を含む
2層	10YR2/1 黒	シルト質砂	弱	弱	黄褐色砂を含む
P6－1層	10YR2/2 黒褐	シルト質砂	弱	弱	黄褐色砂をわずかに含む
2層	10YR2/1 黒	シルト質砂	弱	弱	黄褐色砂をしもふり状に含む

第26図　第１号掘立柱建物跡

第２号掘立柱建物跡

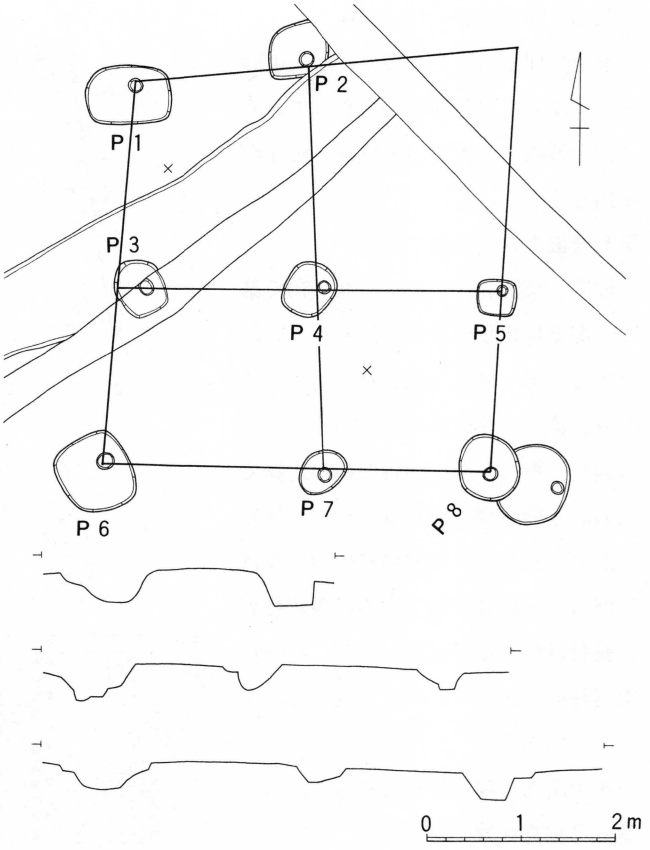
〔位置〕東調査区北部Ｇ・Ｈ－11・12で第３号掘立柱建物の東側に位置している。

〔重複〕溝に切られている。

〔規模〕桁行２間、梁行２間の総柱建物である。柱間は北側柱列で1.84ｍ、南側柱列で2.34、1.78ｍ、西側柱列で2.14、1.88ｍ、東側柱列で1.94ｍである。

〔柱穴〕柱穴は長軸が42～90㎝、短軸が38～74㎝で、隅丸方形ないし長方形を呈している。柱根跡はいずれも円形で径が12～18㎝、深さが11～34㎝である。

〔出土遺物〕検出されなかった。



第27図　第２号掘立柱建物跡

第３号掘立柱建物跡

〔位置〕東調査区北部Ｇ－11で第２号掘立柱建物の西側に位置している。

〔重複〕溝に切られている。

〔規模〕桁行２間、梁行２間の総柱建物である。柱間は北側柱列で2.22、1.90ｍ、南側柱列で2.34、2.30ｍ、西側柱列で2.26、2.40ｍ、東側柱列で2.42、2.44ｍである。

〔柱穴〕柱穴は一辺が60～94㎝の方形を呈しているものと長軸が110～174㎝、短軸が86～146㎝の長方形を呈しているものがある。柱根跡は円形で、径が14～20㎝、深さが22～45㎝である。

〔埋土〕埋土は２層～４層からなり、ほとんどが黒褐色砂層である。

〔出土遺物〕土師器・須恵器の小破片が出土している。土師器では内黒のものがある。

第４号掘立柱建物跡

〔位置〕東調査区西部Ｅ・Ｆ－９・10で第１号掘立柱建物の南側に位置している。

〔重複〕第５号掘立柱建物および第13号住居を切っている。

〔規模〕桁行４間、梁行２間の東西棟である。桁行は北側柱列で総長8.04ｍ、南側柱列で総長7.70ｍである。柱間は北側柱列が西から2.10、1.90、1.60、2.44ｍ、南側柱列が西から1.94、1.88、1.82、2.06ｍである。梁行は西側柱列で総長4.68ｍ、東側柱列で総長5.16ｍである。柱間は西側柱列が北から2.16、2.52ｍ、東側柱列が北から2.68、2.48ｍである。

〔柱穴〕柱穴は楕円形のものもあるがほぼ長方形を呈しており、長軸が44～76㎝、短軸が40～58㎝である。柱根跡は南東隅以外のものすべてにみられ、いずれも円形を呈している。径は14

～22cm、深さが24～42cmである。

〔埋土〕埋土は３～５層で、暗褐色砂層とにぶい黄褐色砂層からなっている。

〔出土遺物〕土師器・須恵器の破片が検出している。

第５号掘立柱建物跡

〔位置〕東調査区中央Ｆ－９・10で第４号掘立柱建物の東側に位置している。

〔重複〕第４号掘立柱建物に切られており、第９号住居を切っている。

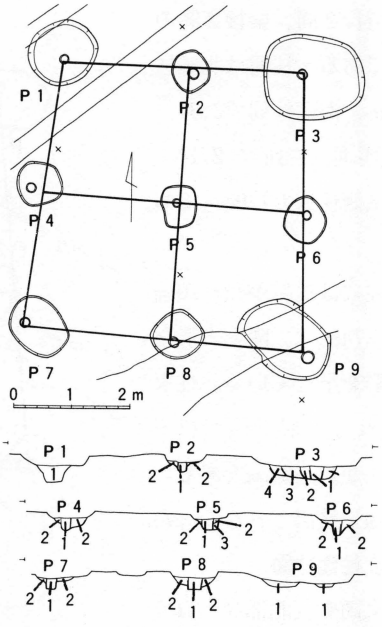
〔規模〕桁行２間、梁行２間の建物である。北側柱列の総長は4.50ｍで柱間が2.20、2.30ｍ、南側の柱列の総長は5.08ｍで柱間は不明である。西側柱列の総長は4.28ｍで柱間は2.22、2.06ｍ、東側柱列の総長は4.68ｍで柱間は2.34、2.34ｍである。

〔出土遺物〕検出されなかった。

第６号掘立柱建物跡

〔位置〕東調査区西部Ｅ－11・12で第１号掘立柱建物の東側に位置している。

〔重複〕第７号掘立柱建物および第19号住居を切っている。



土層No.	土色	土性	備考
P1－1層	10YR 3/1 黒褐	砂	
P2－1層	10YR 2/3 黒褐	砂	
2層	10YR 3/1 黒褐	砂	
P3－1層	10YR 2/2 黒褐	砂	
2層	10YR 4/6 褐	砂	
3層	10YR 3/1 黒褐	砂	褐色砂含む
4層	10YR 3/1 黒褐	砂	
P4－1層	10YR 3/1 黒褐	砂	
2層	10YR 2/3 黒褐	砂	
P5－1層	10YR 3/1 黒褐	砂	
2層	10YR 3/1 黒褐	砂	
3層	10YR 3/2 黒褐	砂	
P6－1層	10YR 3/1 黒褐	砂	
2層	10YR 3/2 黒褐	砂	
P7－1層	10YR 3/1 黒褐	砂	
2層	10YR 3/1 黒褐	砂	(3/2黒褐色砂含む)
P8－1層	10YR 3/1 黒褐	砂	
2層	10YR 3/1 黒褐	砂	(1層より暗い)
P9－1層	10YR 3/1 黒褐	砂	

第28図　第３号掘立柱建物跡

〔規模〕桁行４間、梁行１間の南北棟である。桁行は北側柱列で総長5.12ｍ、柱間は1.38、1.18、1.20、1.36ｍである。南側柱列の総長5.16ｍ、柱間は1.40、1.16、1.32、1.28ｍである。梁行は西側柱列で柱間3.84ｍ、東側柱列で柱間3.84ｍである。

〔柱穴〕柱穴は径が26～56cmの円形ないし楕円形を呈している。柱根跡は南側柱列のみで検出されており、いずれも円形を呈している。径は16～18cm、深さが８～21cmである。

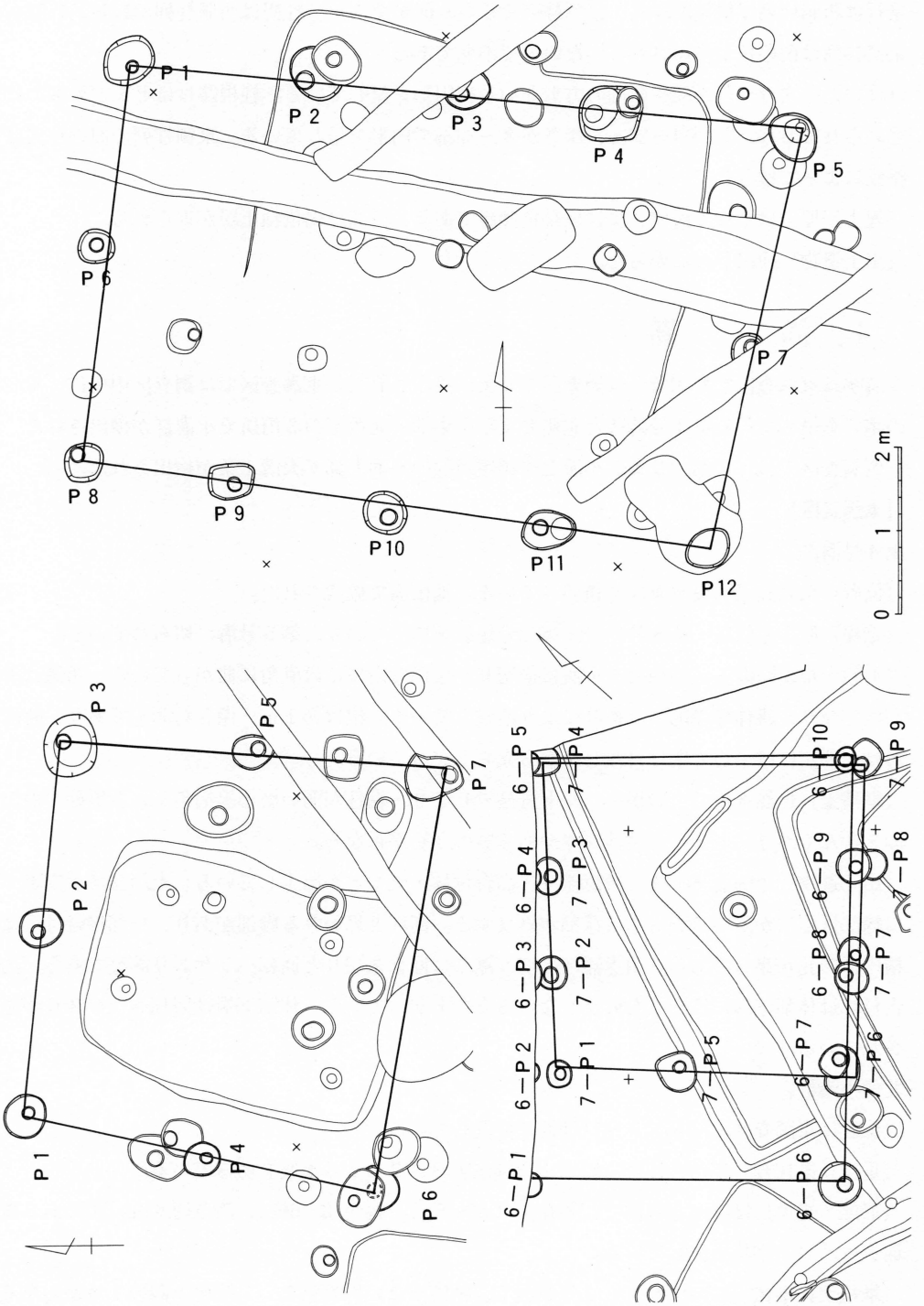
〔埋土〕埋土は３～５層で、暗褐色・黒褐色砂層と黄褐色粘土層からなる。層中には黄褐色砂あるいは黄褐色粘土を含むものがある。

〔出土遺物〕検出されなかった。

第７号掘立柱建物跡

〔位置〕東調査区西部Ｅ－９・10で第１号掘立柱建物の東側に位置している。

〔重複〕第19・20号住居を切っており、第６号掘立柱建物に切られている。



第29図　第４号・５号・６号・７号掘立柱建物跡

〔規模〕桁行３間、梁行２間の南北棟である。桁行は北側柱列で総長3.78ｍ、南側柱列で総長3.62ｍである。柱間は北側柱列で1.20、1.20、1.38ｍ、南側柱列で1.28、1.14、1.20ｍである。梁行は西側柱列で総長3.36ｍ、東側柱列で総長3.66ｍである。柱間は西側柱列で1.44、1.92ｍ、東側柱列は間の柱が検出されていないので不明である。

〔柱穴〕柱穴は一辺が32～44㎝の方形ないし楕円形を呈している。柱根跡はほとんどのものに認められており、径が14～20㎝、深さが８～33㎝で円形を呈している。東側柱列の間の柱穴は攪乱によって壊されている。

〔埋土〕埋土は２～４層で、主に黒褐色砂層であり、一部に褐色粘土層がみられる。

〔出土遺物〕検出されなかった。

４．溝　　跡

溝跡は東調査区で約50条、西調査区で４条が検出された。東調査区では調査区中央に「く」の字状を呈している第４号溝跡と北側および南東部・北西部の３箇所で小溝群が検出された。

西調査区では平坦部で３条の小溝と西側傾斜部の斜面上部で大溝１条が検出された。

【東調査区】

第４号溝跡

〔位置〕東調査区中央を東西に横切っている。地山面で確認された。

〔重複〕第３号住居・第８号住居・第13号住居を切っており、第５号溝に切られている。

〔形態・規模〕調査区の中央を東西に横切り、東側で南にほぼ直角に曲がっている。西側は溝が浅くなり、耕作等の削平・攪乱により消滅している。幅は約１ｍ、深さ約30㎝であり、断面形は底部がほぼ平坦で壁は外傾しながら立ち上がっている。

〔堆積土〕自然堆積で、暗褐色シルト質砂でしまり・粘性が弱い層と黒褐色シルト質砂で地山砂を含んでおり、しまり・粘性がややある層の２層からなる。

〔出土遺物〕土師器坏・甕、須恵器坏・高台付坏・甕などが出土している。土師器坏は内黒で口縁部近くにかるい稜をもち口縁部が外反する。高坏と思われる脚部があり、坏部接合付近に楕円形の孔が穿ってある。須恵器坏の切り離しは回転糸切りと回転ヘラケズリ調整である。高台付坏は体部下端に稜をもち外反しながら立ち上がっている。体部下端は回転ヘラケズリが施されている。

北側小溝群

〔位置〕東調査区北部Ｅ・Ｆ－11付近に位置している。

〔重複〕第16号・17号・18号・22号・23号住居および第２号土壙を切っている。

〔形態・規模〕ほぼ南北方向で、残存長は３～５ｍ、幅が18～60㎝、深さ約６㎝前後である断面形は「Ｕ」字状を呈している。

〔堆積土〕堆積土はいずれもしまりが弱く、粘性がない黒褐色ないし暗褐色砂の１層からなる。自然堆積である。

〔出土遺物〕検出されなかった。

南東部小溝群

〔位置〕東調査区南東部H・I－9・10に位置している。

〔重複〕第6号・7号・12号住居および10号土壙（井戸）に切られている。

〔形態・規模〕住居や耕作による削平等により不明なところがあるが、残存長は3～8m、幅は20～30cm、深さ3～10cmで断面形は「U」字状を呈している。

〔堆積土〕堆積土はいずれもしまり・粘土性が弱い黒褐色砂の1層からなる。自然堆積である

〔出土遺物〕検出されなかった。

北西部小溝群

〔位置〕東調査区北西部D・E・F－7・8・9に位置している

〔重複〕なし

〔形態・規模〕未発掘の部分があり全体の形態は不明な点もあるが、溝の長さ約3.5m前後、幅が20cm前後、深さが5cm前後で断面形は「U」字状を呈している。

〔堆積土〕堆積土はいずれも黒褐色砂でしまり・粘性が弱の1層からなる。

〔出土遺物〕検出されなかった。

これらの小溝は長さ・幅・深さ・方向・間隔等がほぼ一定であるまとまりが5群確認された。1つの小群の範囲は約3.5×4.0mであり、畝跡の可能性があると考えられる。

【西調査区】

第1号溝跡

西調査区中央C－5に位置し、攪乱によって切られている。トレンチ掘のため全体形は不明である。残存長は約3m、幅約70cm、深さ約8cmで断面形は「U」字状を呈している。堆積土は黒褐色シルト質砂の自然堆積土が1層確認されたのみであり、遺物は検出されなかった。

第2号溝跡

西調査区東側B～D－6に位置し、第3号溝や土壙・攪乱に切られている。溝はグリッドにほぼ平行に南北方向に延びており、残存長約24m、幅約70～80cm、深さ約5cm前後で断面形は「U」字状を呈している。堆積土は黒褐色砂の自然堆積土が1層確認されたのみであり、遺物は検出されなかった。

第3号溝跡

西調査区東側B－6に位置し、攪乱によって切られ第2号溝を切っている。溝は東西方向に延びており、残存長約4m、幅約50cm、深さ約5cm前後で断面形は「U」字状を呈している。堆積土は黒色砂の自然堆積土が1層確認されたのみであり、遺物は検出されなかった。

第4号溝跡

西調査区西側D・E－4に位置し、土壙・ピット等に切られている。溝は地山面の落ち込みのラインに沿って南北方向に延びており、残存長は約11.5m、幅約2.5m、深さ5～10cmであ

り、溝の残りはあまり良くなく壁の立ち上がりは不明瞭であるが、底面がほぼ平坦で壁は底面から外傾しながら立ち上がっている。堆積土は黒褐色砂の自然堆積土が１層確認されたのみであり、遺物は検出されなかった。

溝の幅が他の溝より広く、地山面の落ち込み際に位置していることから区画溝の可能性も考えられるが、残りがあまり良くないので断定できない。

５．土壙・井戸跡

精査の段階で土壙番号をつけたが、後に井戸跡になったものがあるので、土壙と井戸跡を併せて説明を行う。東調査区では土壙が21基、井戸と思われるものが３基が確認され、西調査区では土壙が６基、井戸と思われるものが１基確認された。

【東調査区】

第１号土壙

〔位置〕東調査区南側Ｉ－10で、第６・７号住居の南側に位置し、地山面で確認された。〔重複〕第７号・８号土壙を切っている。

〔形態・規模〕平面形は楕円形を呈しており、長軸約2.82ｍ、短軸約2.36ｍ、深さ約30㎝である。底面はやや平坦であり、壁は緩やかに立ち上がっている。壁、床面は地山からなる。

〔堆積土〕堆積土は灰黄褐色・褐灰色・暗褐色等で砂質シルト層の５層からなる。１～３層には炭化粒を僅かに含んでおり、４・５層には灰白色土を含んでいる。いずれも自然堆積である

〔出土遺物〕遺物は各層および底面から土師器甕・壺・器台・手捏ね土器が出土している。甕の外面調整はハケメ調整、ハケメの後ミガキ調整等が施されており、壺は複合口縁で外面ミガキ調整が施されている。器台は貫通孔が坏底部と脚部に３つ見られる。

第２号土壙

〔位置〕東調査区北側Ｅ－11で第17号住居等の北側に位置している。

〔重複〕なし

〔形態・規模〕平面形は径約1.50ｍのほぼ円形を呈しており、深さは約65㎝で底面は丸みをおび、壁は外傾しながら緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕黒褐色砂および褐灰色砂等の自然堆積土４層からなる。層中には炭化物および遺物の混入が認められる。

〔出土遺物〕１層より土師器・須恵器の破片が検出され、３・４層からは土師器器台が出土している。遺構確認面直上まで攪乱がおよんでいるので、１層出土の遺物は混入したものと考えられる。器台は貫通孔が坏底部と脚部に３つ見られる。

第５号土壙

〔位置〕東調査区東側Ｉ－12で第３号住居の北側に位置している。

〔重複〕なし

〔形態・規模〕平面形は長軸約2.12ｍ、短軸約1.35ｍの楕円形を呈している。深さは約28㎝で

断面は底面が丸みがあり、壁は底面より緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕暗灰褐・黄灰白・黄褐色砂の３層からなる。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕東側壁面より土師器壺が１点出土している。外面はハケメ調整の後ミガキ調整が施されており、口縁は複合口縁である。

第６号土壙

〔位置〕東調査区東側Ｉ－12で第５号土壙の北側に位置している。

〔重複〕なし

〔形態・規模〕平面形は西側が直線であるが東側が丸みをおびている不整形を呈している。規模は長辺約1.28ｍ、短辺約1.10ｍである。深さ約23㎝で底面は丸みをおび壁は緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕堆積土は黒褐色砂層とオリーブ褐色砂層の２層である。いずれも自然堆積である。

〔出土遺物〕検出されなかった。

第12号土壙

〔位置〕東調査区北側Ｅ－11で第13号土壙の北側に位置している。

〔重複〕なし

〔形態・規模〕平面形は長軸約1.60ｍ、短軸約1.55ｍのほぼ円形を呈している。断面形は深さ約40㎝で底部は丸く壁は緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕黒色砂、黒褐色砂、黒色シルト質砂の３層の自然堆積土からなる。

〔出土遺物〕検出されなかった。

第13号土壙

〔位置〕東調査区北側Ｅ－11で第12号土壙の南側に位置している。

〔重複〕なし

〔形態・規模〕平面形は長軸約1.26ｍ、短軸約1.18ｍのほぼ円形を呈している。断面形は深さ約35㎝で底部は丸く壁は緩やかに立ち上がっている。

〔出土遺物〕検出されなかった。

第17号土壙

〔位置〕東調査区西側Ｇ－８に位置している。

〔重複〕なし

〔形態・規模〕平面形は長軸約80㎝、短軸約50㎝の楕円形を呈している。断面形は深さ約26㎝で底面が丸く壁が緩やかに立ち上がっている。

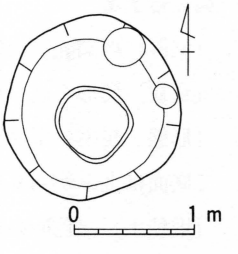
〔出土遺物〕土師器壺・甕が検出された。

第９号土壙（井戸跡）

〔位置〕東調査区中央部Ｇ－９・10に位置している。

〔重複〕第10号住居に切られている。

〔形態・規模〕平面形は、径約1.56ｍの円形で、一本の木をくり抜い



第30図　第９号土壙(井戸)

た、径約64㎝の円形を呈した井戸枠を検出した。

〔堆積土〕自然堆積で黒褐色砂などが確認されたが、堆積土が砂のため底面まで掘ることが出来なかった。

〔出土遺物〕土師器壺・甕などが検出された。壺は複合口縁で外面にハケメ調整が施されている。

第10号土壙（井戸跡）

〔位置〕東調査区南部Ｈ－９・10で第12号住居の北側に位置している。

〔重複〕南東部小溝群の溝を切っている。

〔形態・規模〕平面形は径約1.58ｍの円形を呈しており、井戸枠は一辺約60㎝の方形を呈している。井戸枠は幅約15㎝の板材を組み合わせたものである。

〔堆積土〕黒褐色砂を確認したが、湧水のため底面まで掘り下げることが出来なかった。

〔出土遺物〕土師器・須恵器の小破片が検出された。

第11号土壙（井戸跡？）

〔位置〕東調査区北側Ｅ－10で第13号土壙の西側に位置している。

〔重複〕第19・20号住居を切っている。

〔形態・規模〕平面形は長軸約2.88ｍ、短軸約2.74ｍのほぼ円形を呈している。遺構内には約20㎝前後の石が円形に巡っていることから、井戸の可能性が考えられる。

〔堆積土〕黒褐色シルト質砂の自然堆積土のみ確認された。

〔出土遺物〕検出されなかった。

【西調査区】

第１号土壙

〔位置〕西調査区西側Ｄ－４に位置している。

〔重複〕ピットを切っている。

〔形態・規模〕平面形は長軸約２ｍ、短軸約1.50ｍの楕円形を呈しており、断面形は深さ約80㎝で底面は丸みがあり壁は外反しながら立ち上がっている。

〔堆積土〕黒褐色砂質シルトでしまりがややあり粘性が弱の堆積土が確認された。

〔出土遺物〕土師器・須恵器の破片が僅かに検出された。

第２号土壙

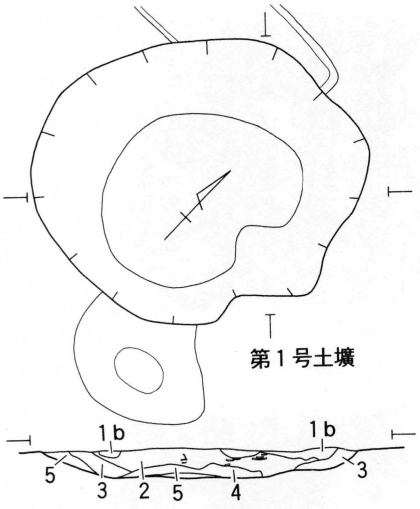
〔位置〕西調査区南側Ｄ－５に位置している。

〔重複〕認められなかった。

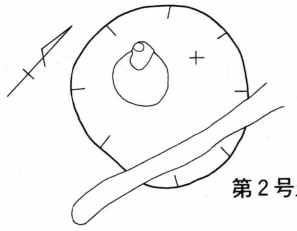
〔形態・規模〕平面形は長軸約１ｍ、短軸約50㎝の楕円形を呈しており、断面形は深さ約18㎝で底面は丸みがあり壁は緩やかに立ち上がっている。

〔堆積土〕褐色砂の自然堆積土が確認された。

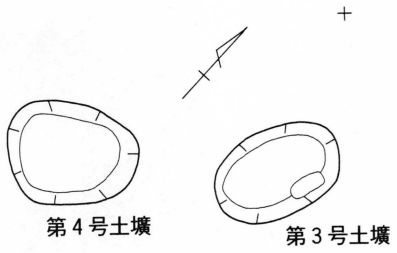
〔出土遺物〕土師器・須恵器の破片が僅かに検出された。



第1号土壙

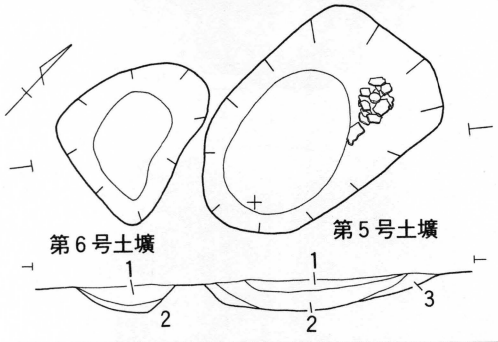


第2号土壙

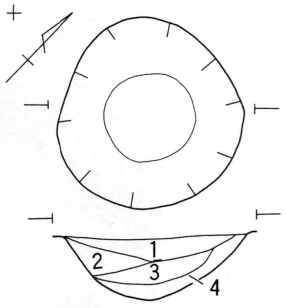


第4号土壙　第3号土壙

土層No.	土　色	土　性	備　考
1a層	10YR5/2　灰黄褐	砂	炭化粒微量混入
1b層	10YR6/1　褐灰	砂	炭化粒、焼土粒微量混入
2層	10YR3/3　暗褐	砂	炭化粒、焼土粒若干、土器含む
3層	7.5YR4/2　灰褐	砂	炭化粒少量、灰白色小ブロックを比較的多く混入
4層	10YR5/2　灰黄褐	砂	灰白色小ブロックを若干混入
5層	10YR5/6　黄褐	砂	灰白色小ブロック微量混入



第6号土壙　第5号土壙

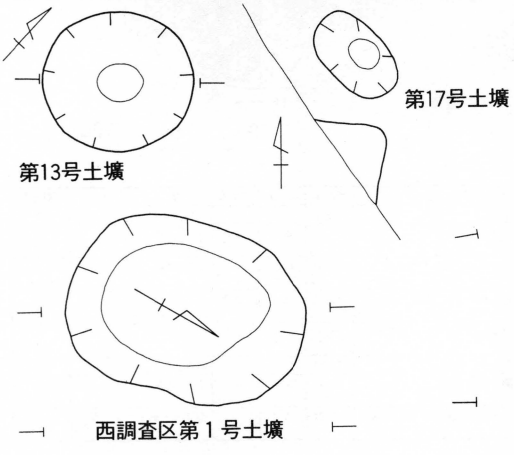


第12号土壙

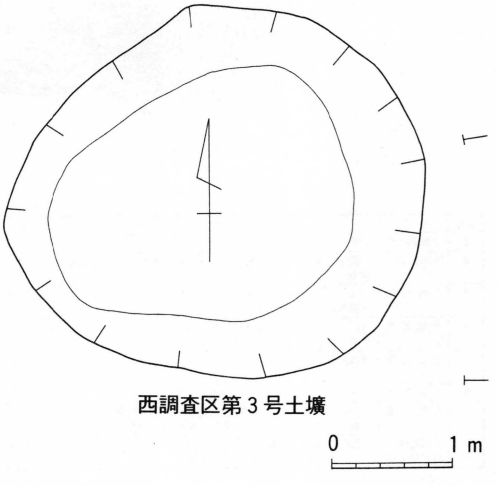
土層No.	土　色	土　性	粘　性	しまり	備考
1層	10YR2/1　黒	砂	弱	弱	酸化鉄含む、砂粒2層より細い
2層	10YR3/1　黒褐	砂	なし	弱	シルト質砂、酸化鉄含む
3層	10YR1/7　黒	シルト質砂	やや有り	やや有り	地山砂混入、酸化鉄含む
4層	10YR4/6　褐	砂	なし	弱	地山

土層No.	土　色	土　性
1層	2.5Y3/1黒褐	細砂
2層	2.5Y4/3オリーブ褐	細砂

土層No.	土　色	土　性
1層	2.5Y4/2　暗灰褐	細砂
2層	2.5Y4/1　黄灰白	細砂
3層	2.5Y5/4　黄褐	細砂



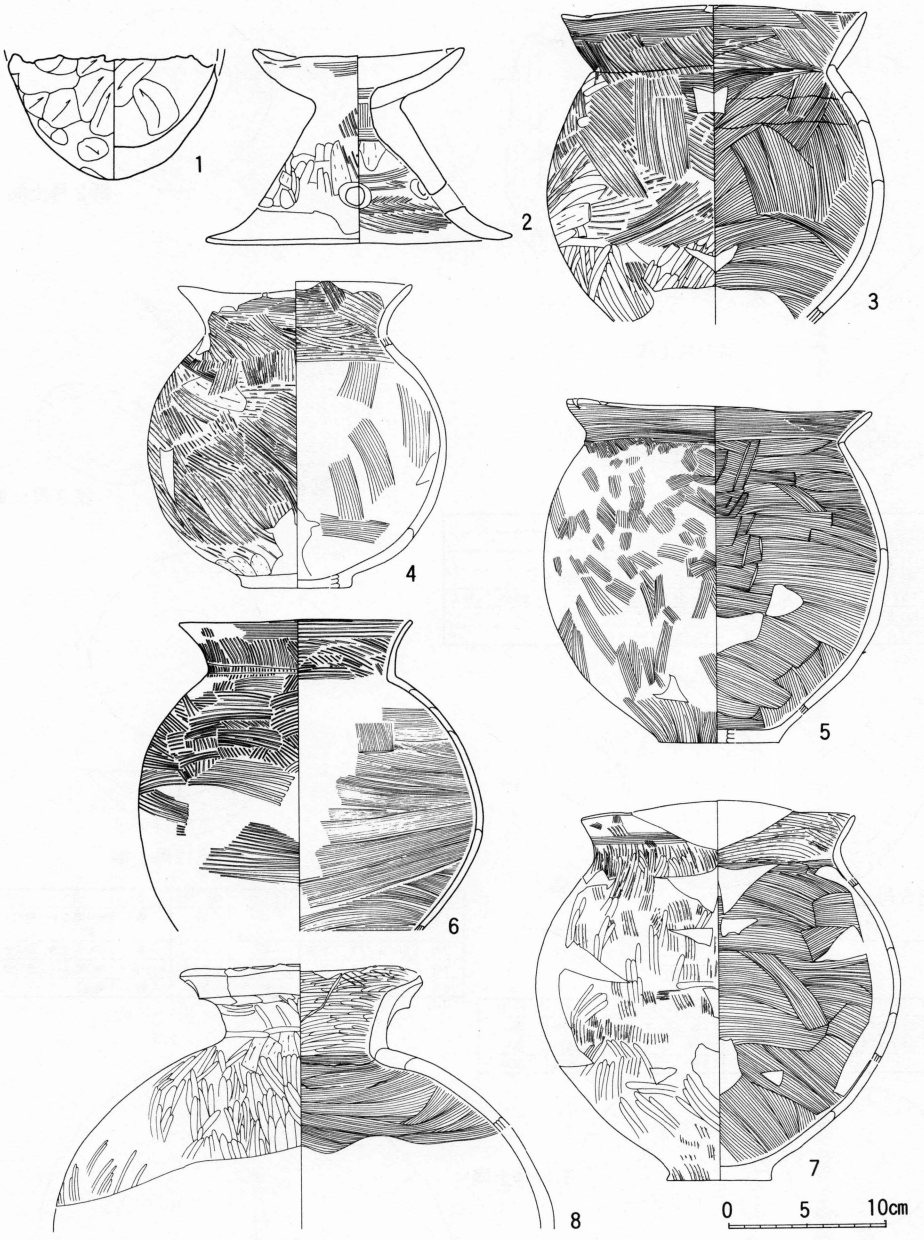
第13号土壙　第17号土壙



西調査区第1号土壙　西調査区第3号土壙

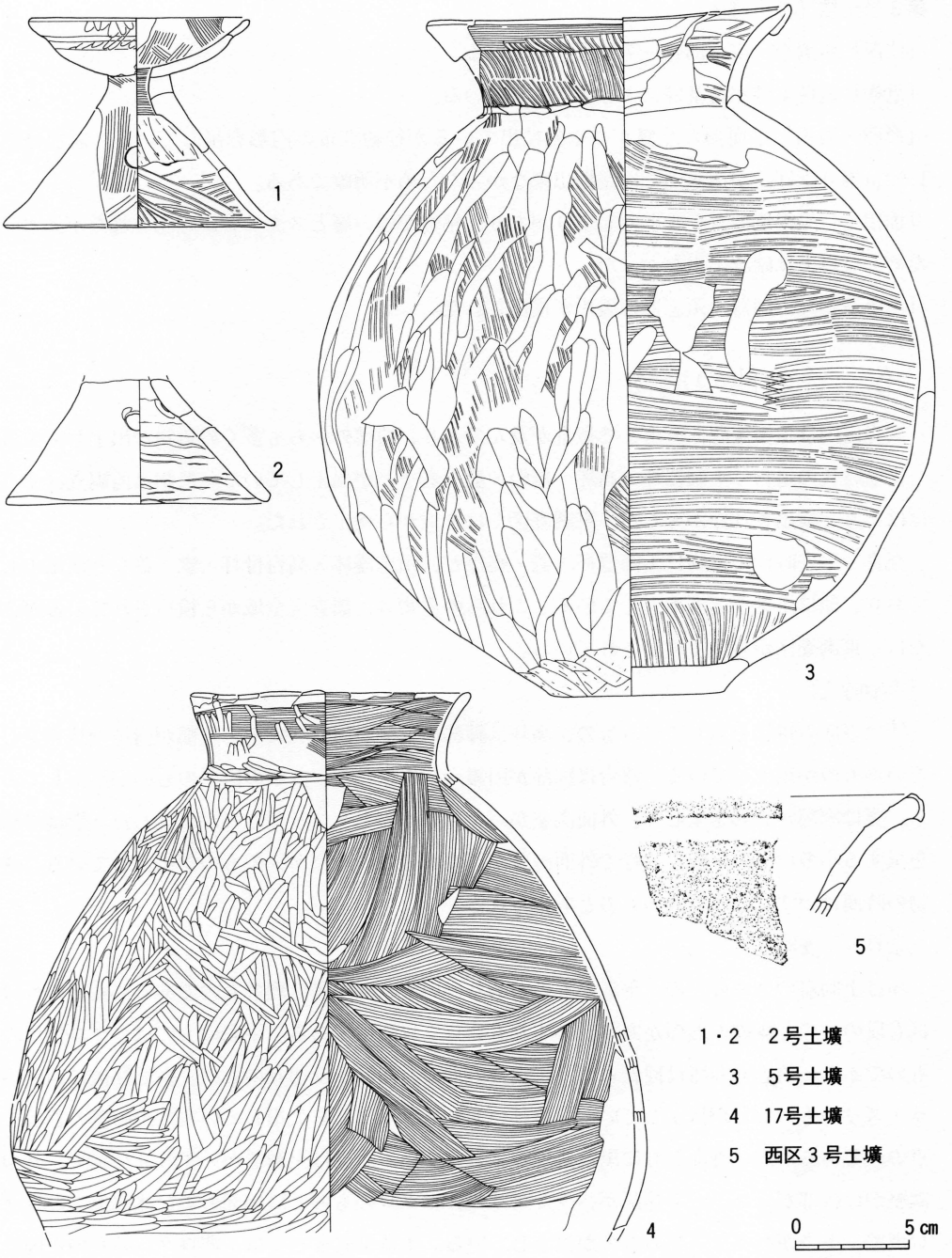
0　1m

第31図　東調査区・西調査区土壙



番号	種別	外面調整	内面調整	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版
1	土師器手捏	ナデ	ナデ	(3.6)	—	—	口縁部欠損	58
2	土師器器台	〔器受〕ヨコナデ 〔脚〕ハケメ→ヘラケズリ→ミガキ	〔脚〕ヘラケズリ、ヘラナデ、ハケメ	8.2	9.0	13.0	1/3欠損	59
3	土師器甕	〔口〕ヨコナデ→ハケメ 〔胴上〕ハケメ→ミガキ 〔胴下〕ハケメ→ミガキ→ヘラケズリ	〔口〕ヨコナデ→ハケメ 〔胴〕ヘラナデ	(14.8)	14.1	—	1/3残存	—
4	土師器甕	〔口〕ヨコナデ→ハケメ 〔胴上〕ヘラケズリ→ハケメ 〔胴下〕ヘラケズリ→ハケメ	〔口〕ハケメ 〔頸〕ハケメ 〔胴〕ヘラナデ	19.3	14.9	7.0	1/4欠損	62
5	土師器甕	〔口〕ヨコナデ 〔胴〕ナデ 〔底〕ナデ	〔口〕ヨコナデ 〔胴〕ヘラナデ 〔底〕ヘラナデ	21.8	19.4	7.6		64
6	土師器甕	〔口〕ヨコナデ→ハケメ 〔胴〕ハケメ	〔口〕ハケメ 〔胴〕ヘラナデ	(19.6)	14.8	—	底部欠損	61
7	土師器甕	〔口〕ハケメ→ヨコナデ 〔頸〕ハケメ→ミガキ 〔胴〕ハケメ→ミガキ 〔底〕ハケメ→ミガキ	〔口〕ハケメ 〔胴〕ヘラナデ	23.4	(17.4)	6.7	1/3残存	63
8	土師器複合口縁壺	〔頸〕ミガキ 〔胴〕ヘラケズリ→ミガキ	〔口〕ミガキ→ハケメ 〔頸〕ミガキ 〔胴〕ヘラケズリ	(15.0)	15.4	—	口縁部～胴上半部残存	60

第32図　第1号土壙出土遺物



番号	種別	外面調整	内面調整	器高cm	口径	底径cm	備考	写真図版
1	土師器器台	〔器受〕ミガキ　〔脚〕ナデ	〔器受〕ナデ　〔脚〕ヘラケズリ、ハケメ	9.2	9.8	12.0	1/4残存　第2号土壙出土	66
2	土師器器台		〔脚〕ナデ	(5.4)	—	11.7	脚部のみ残存　第2号土壙出土	65
3	土師器複合口縁壺	〔口〕ヨコナデ→ハケメ　〔頸〕ハケメ　〔胴〕ハケメ→ミガキ　〔底〕ヘラケズリ	〔口〕ハケメ→ミガキ　〔頸〕ハケメ→ミガキ　〔胴〕ハケメ　〔底〕ハケメ	30.2	16.2	—	第5号土壙出土	67
4	土師器壺	〔口〕ヨコナデ→ミガキ　〔胴〕ミガキ	〔口〕ヨコナデ→ミガキ　〔胴〕ヘラナデ	(24.0)	12.3	—	口縁部～胴上半部残存第17号土壙出土	68
5	須恵器甕	〔口〕ロクロ→波状沈線	〔口〕ロクロ	—	—	—		82

第33図　土壙出土遺物

第３号土壙（井戸跡？）

〔位置〕西調査区南東部Ｄ－７に位置している。

〔重複〕遺構東側が攪乱等によって切られている。

〔形態・規模〕平面形は北側がやや外に出ているが径約３ｍの円形を呈している。断面は約1.60ｍ掘り下げたが湧水のため完掘出来なかったため不明瞭である。

〔堆積土〕黒褐色砂質シルトでしまりがあり、粘性が強い層とスクモ層が確認されたが湧水のためそれ以上は確認出来なかった。

〔出土遺物〕土師器・須恵器の破片が検出された。

６．その他の遺物

調査区内は遺構確認面直上まで攪乱が及んでおり、遺構外からも多くの遺物が出土している。

古墳時代の遺物は土師器坏・高坏・器台・甕・壺などが出土している。遺物は西調査区からはほとんど検出されなかったが、東調査区では全域から検出された。

奈良・平安時代の遺物は土師器坏・蓋・甕など、須恵器坏・高台付坏・甕・蓋などが出土しており、他に土錐なども出土している。これらの遺物は、調査区全域から検出されているが、やはり東調査区から多く検出されている。

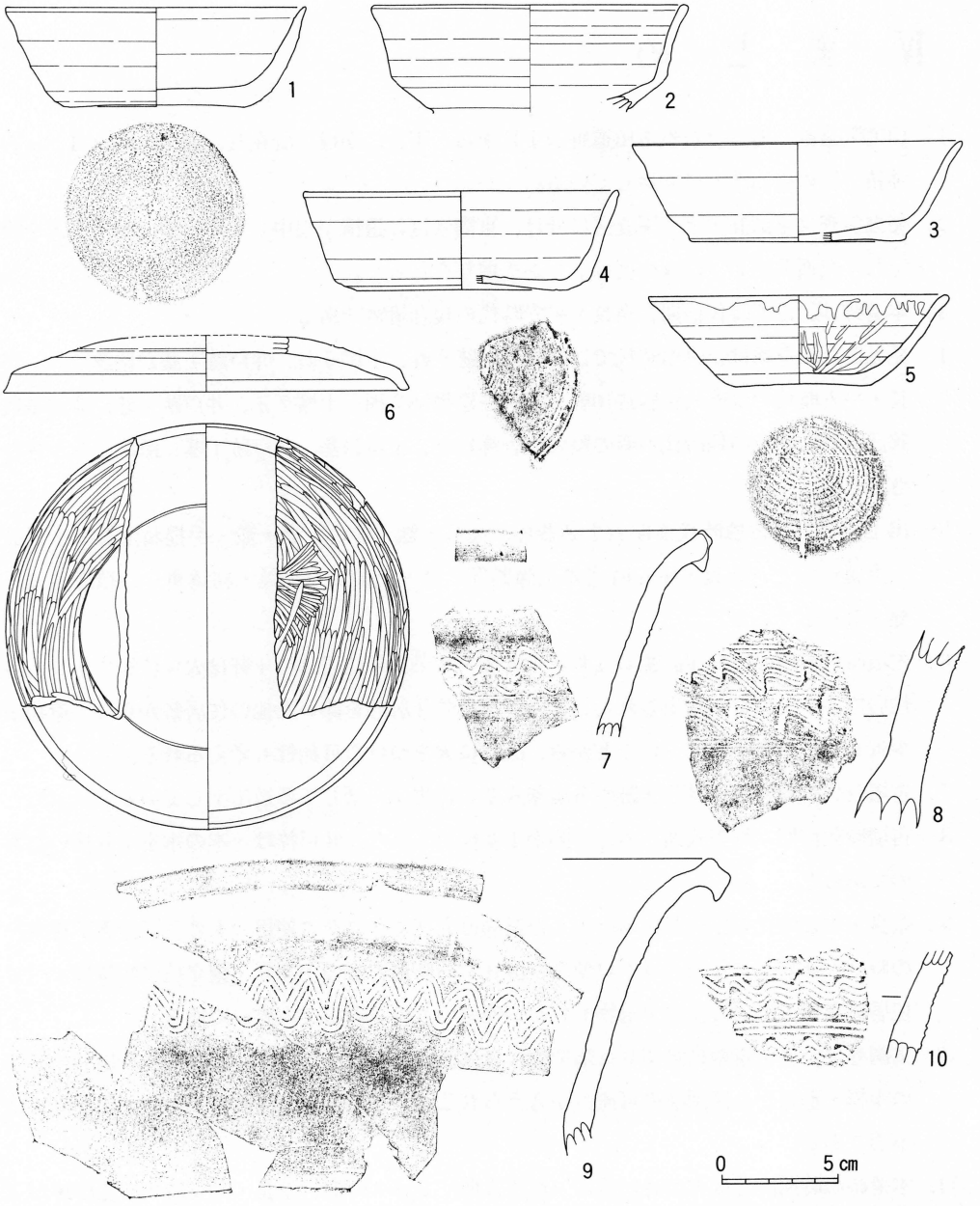
〔古墳時代〕

坏は平底の坩状を呈しているもの、高坏は脚部の上部が円柱状で中・下部が円錐台状を呈しているものが出土している。器台は脚部が円錐台状を呈した、３つの円窓のものが出土している。甕は胴部が球形を呈した、外面調整がハケメのものとケズリのものが出土した。壺は坩状を呈する小型のものと複合口縁で外面調整がミガキのものやハケメのものが出土している。遺物の時期はいずれも塩釜式のものと考えられる。

〔奈良・平安時代〕

坏は土師器の丸底のものと平底のものがあり、いずれも内黒処理のものである。丸底のものは有段のものと無段のものがあり、いずれも非ロクロ使用である。平底のものはロクロ使用のものである。須恵器の坏は回転糸切り無調整のもの、回転ヘラ切りのもの、糸切り後に回転ヘラケズリのものなどが出土している。蓋はいずれもツマミ部を欠損している。土師器の蓋は１点のみであるが内、外面ともに黒色処理が施されている。甕は土師器がいずれも長胴で、外面調整が口縁部がヨコナデで体部がヘラケズリの非ロクロのものと口縁部および体部上半がロクロ調整で下半がヘラケズリのものが出土している。土器型式としては、非ロクロのものが国分寺下層式で、ロクロ使用のものが表杉ノ入式であると考えられる。

奈良・平安時代の土器のおおくはＥ－10グリッド付近から出土しており、非ロクロのものは第14号住居跡から出土した土器と接合したものもある。ロクロ使用のものは、第１号掘立柱建物の遺物の可能性も考えられる。



番号	種別	外面調整	内面調整	器高cm	口径cm	底径cm	備考	写真図版
1	須恵器坏	ロクロ〔体部下端－底部〕回転ヘラケズリ	ロクロ	4.25	12.9	7.7	第4号溝	69
2	須恵器高台付坏	ロクロ→回転ヘラケズリ	ロクロ	(4.6)	(13.6)	(8.8)	第4号溝	—
3	須恵器坏	ロクロ	ロクロ	4.3	14.2	9.3	西区第2号溝	—
4	須恵器坏	ロクロ→回転ヘラケズリ　〔底〕糸切り→回転ヘラケズリ	ロクロ	4.2	13.6	9.0	D－6出土	71
5	土師器坏	ロクロ　〔底〕回転糸切り　「木」ヘラ書き	ロクロ→ミガキ→黒色処理	3.9	12.9	5.8	E－10出土	72
6	土師器蓋	ミガキ→黒色処理	ミガキ→黒色処理	(2.3)	17.4	—	1－9出土	75
7	須恵器甕	ロクロ→波状沈線	ロクロ	—	—	—	E－11出土	80
8	須恵器甕	波状沈線＋平行沈線	ナデ	—	—	—	F－12出土	76
9	須恵器甕	平行叩き→波状沈線	ロクロ	—	—	—	E－10出土	79
10	須恵器甕	波状沈線＋平行沈線	ナデ	—	—	—	表採	81

第34図　溝・その他の遺物

Ⅳ まとめ

1．田道町遺跡Ｃ地点は石巻市田道町一丁目から二丁目にかけて所在し、標高1.5ｍ～1.8ｍの沖積平野の微高地上に立地している。

2．発掘調査は東調査区と西調査区に分け、東調査区に遺構が集中しているのでグリッドを設定して全面発掘し、西調査区はトレンチ掘りを行った。

3．本遺跡は、古墳時代前期、奈良・平安時代の複合遺跡である。

4．発見された遺構は、古墳時代では竪穴住居跡９軒、土壙５基、井戸跡１基が確認され、奈良・平安時代では竪穴住居跡10軒、掘立柱建物跡７棟、土壙２基、井戸跡１基、溝跡多数確認された。その他時代不明の竪穴住居跡10軒、土壙24基、井戸跡１基、溝跡多数が確認された。

5．出土遺物は、古墳時代前期の土師器坏・高坏・甑・器台・甕・壺・手捏ね土器・土製品（土錘）など、奈良・平安時代の土師器坏・甕・土製品（土錘・紡錘車）、須恵器壺・甕・蓋などである。

6．古墳時代前期の竪穴住居跡のうち第１・３・８・18号住居跡の４軒は火災住居であり、各住居内から炭化材が検出された。また、第18号住居跡を除いた他の住居跡からは、遺物が少量しか検出されなかったことから、故意に火をつけた可能性も考えられる。

7．古墳時代前期の第９号住居跡から塩釜式期の遺物が一括して多数出土している。

8．古墳時代前期（塩釜式期）の井戸跡が１基検出された。井戸枠は一本の木をくり抜いたものであった。

9．奈良・平安時代の住居跡から出土した遺物は丸底で非ロクロ使用のもの（国分寺下層式）の時期と非ロクロ使用とロクロ使用が混在する時期のものがあり、掘立柱建物跡はすべて住居跡を切っている。出土遺物もロクロ使用のもの（表杉ノ入式）である。

10．東調査区中央を東西に横切り東端で南にほぼ直角に折れ曲がっている溝跡を検出し、溝跡の規模・形態から区画溝の可能性が考えられるが、どの遺構を区画しているか現段階では不明である。

11．本遺跡の時期区分は古墳時代前期（塩釜式期）２～３時期、奈良・平安時代の住居跡が３時期、掘立柱建物跡が３時期に区分される。

12．東調査区の東端から地山面が落ち込んでおり、また、西調査区の西端から地山面が落ち込んでいる。遺構はこれらの間の平坦面にあり、特に住居跡・掘立柱建物跡は東側に集中している。他の溝や土壙は平坦面全域に見られるが、やはり東側で多く見られる。

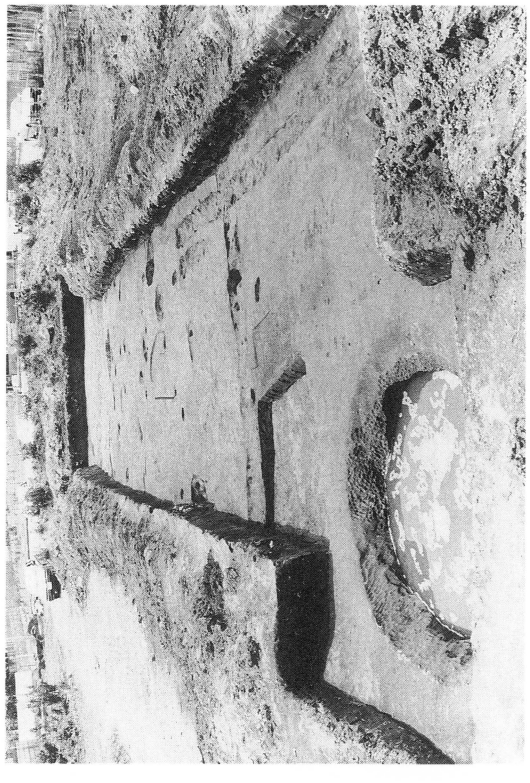
V　写真図版

B・C・D・E－4グリッド

B・C－5グリッド

B・C－6グリッド

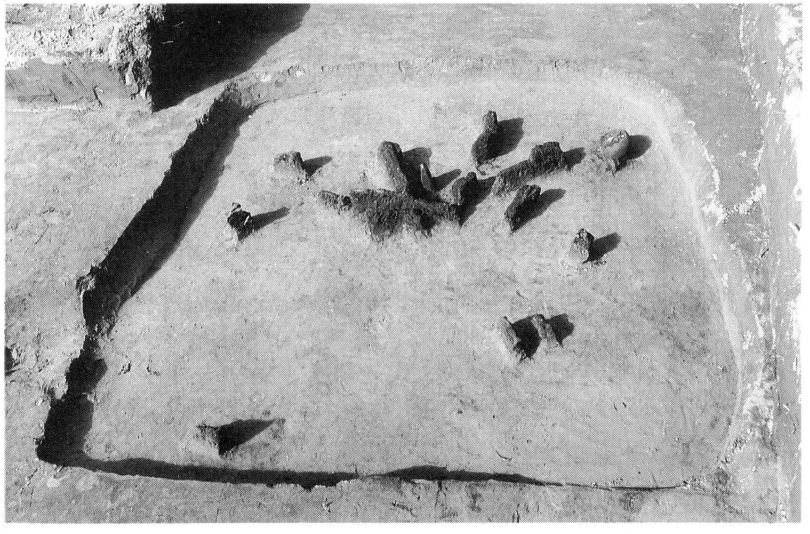
D－4・5・6・7グリッド



西調査区各トレンチ

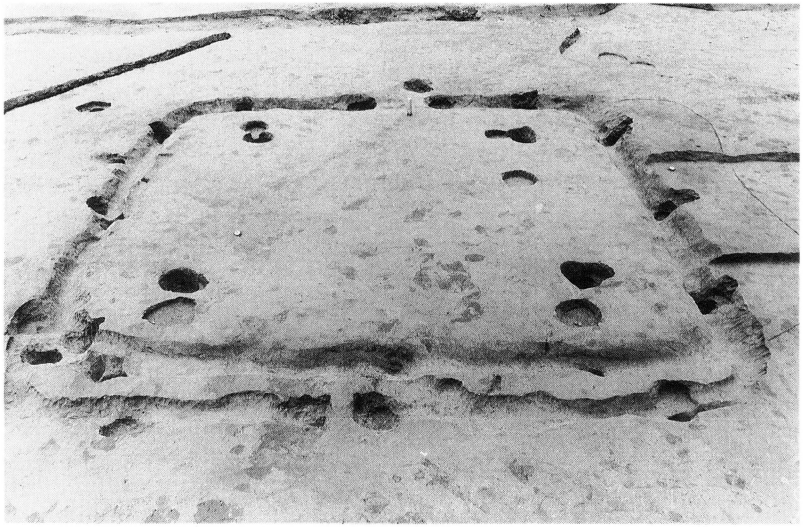
東調査区完掘状況

第１号住居跡



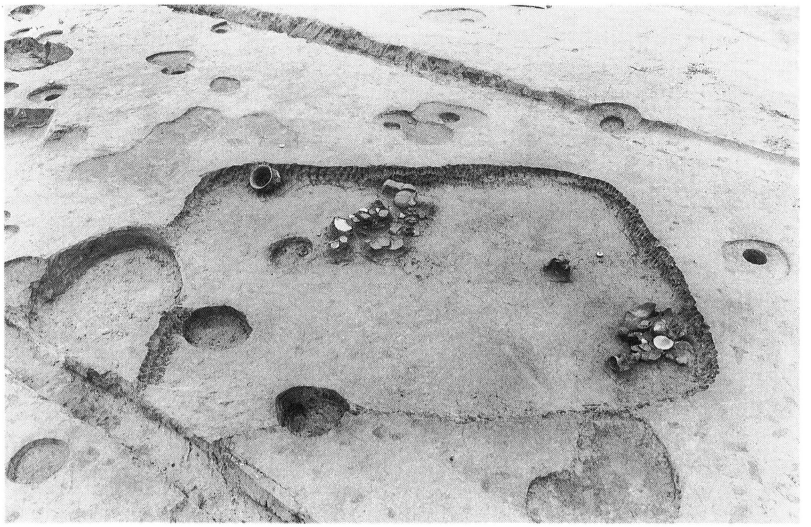
第２号住居跡

第3号住居跡

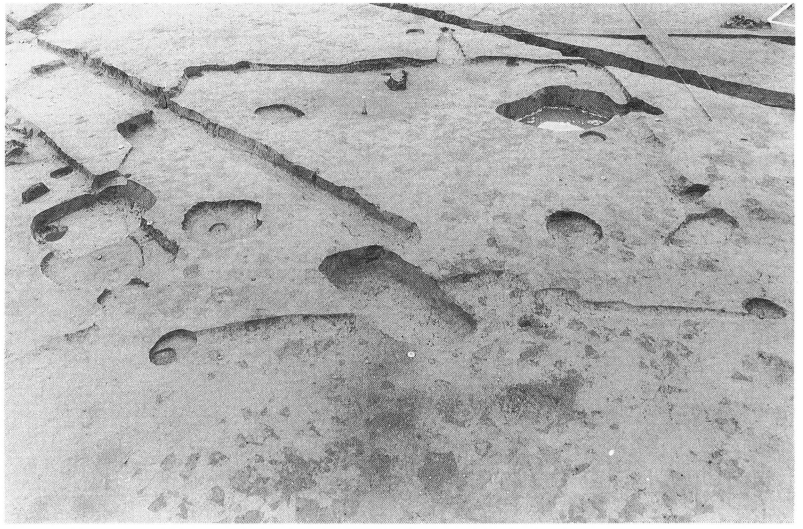


第6・7号住居跡

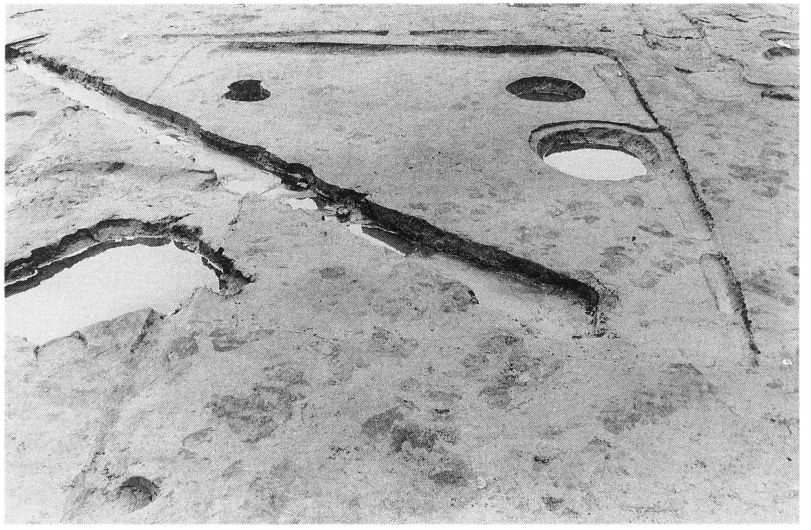
第8号住居跡



第9号住居跡



第10号住居跡



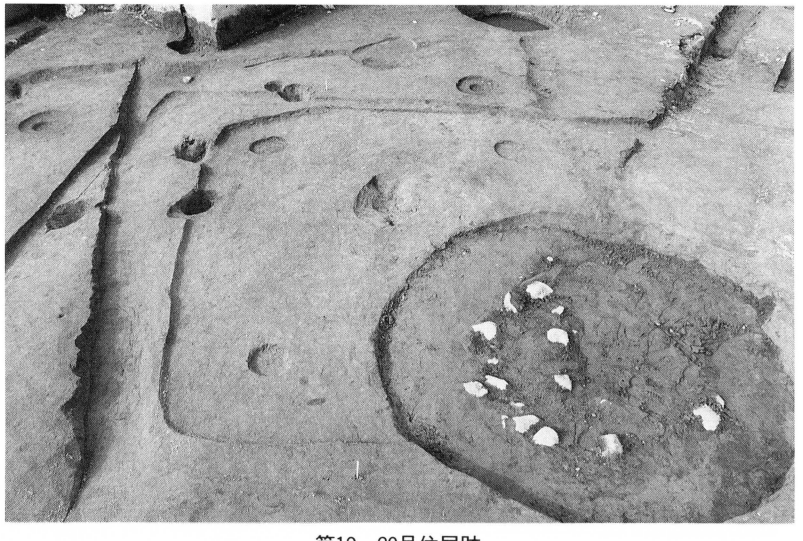
第11号住居跡

第14・15号住居跡

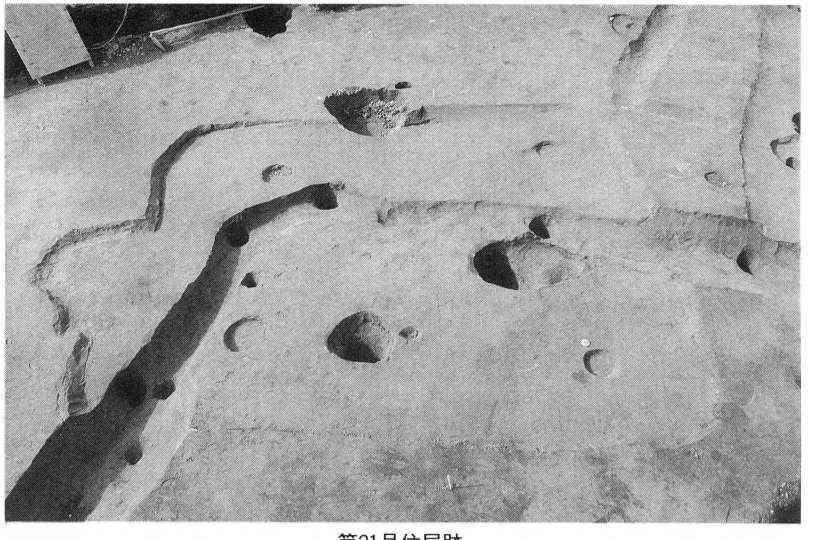
第16号住居跡

第17号住居跡

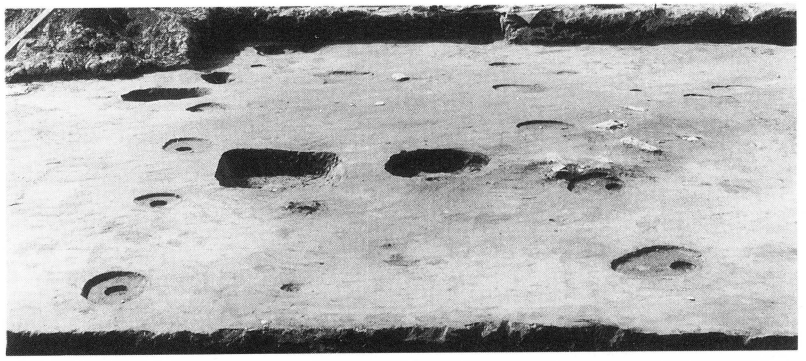
第18・22・23号住居跡



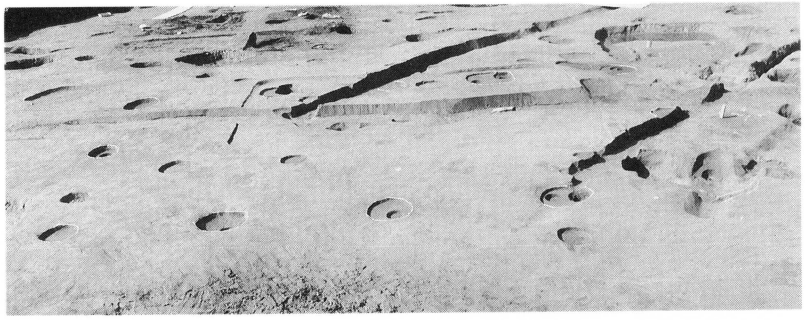
第19・20号住居跡



第21号住居跡

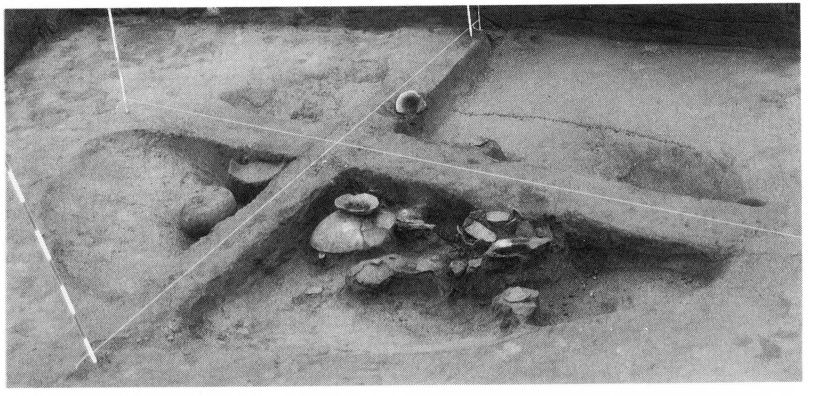


第１号(上)、第２号(中)、第３号(下)掘立柱建物跡

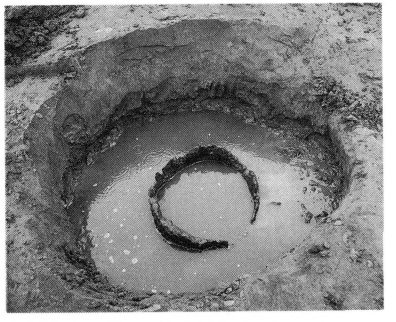


第４号掘立柱建物跡

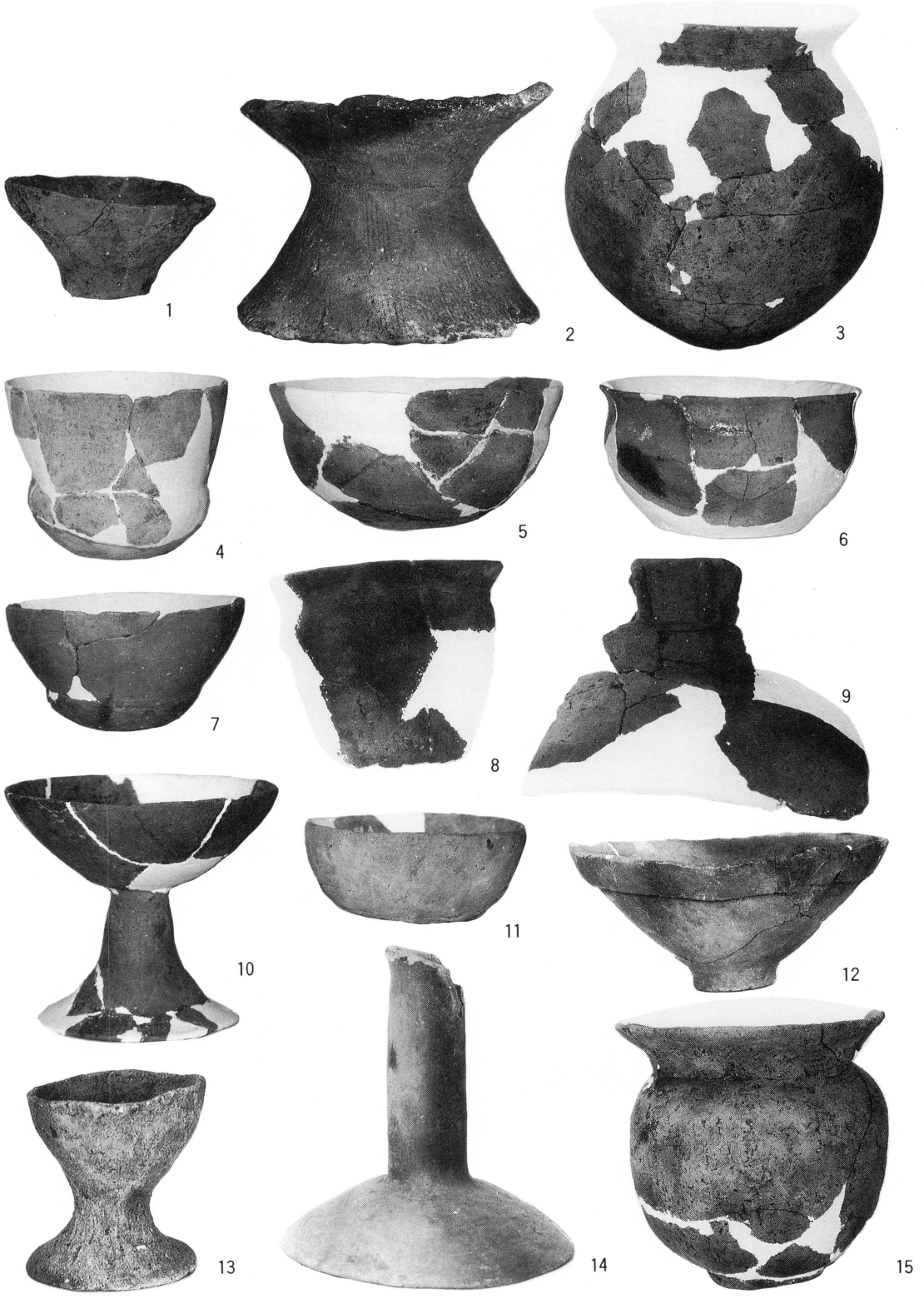
第１号土壙



第５・６号土壙



第９号土壙(井戸)

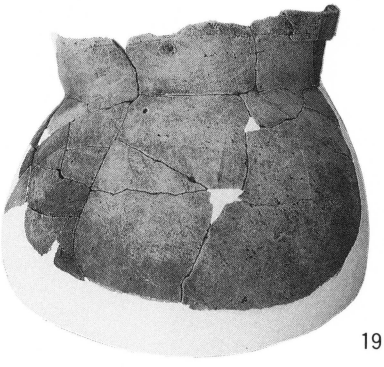


1～3　1号住居跡　　4～9　3号住居跡　　10　8号住居跡　　11～15　9号住居跡

16

17

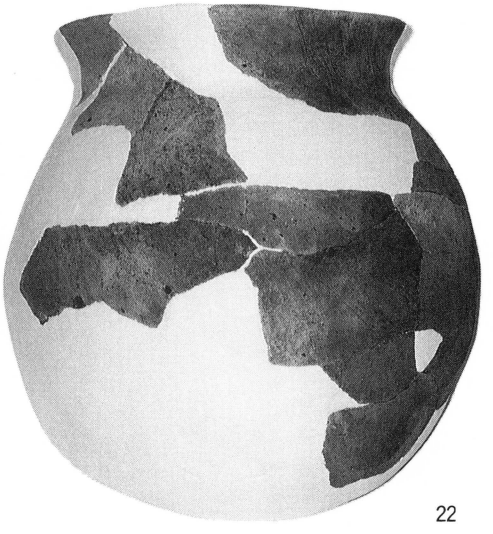
18



19

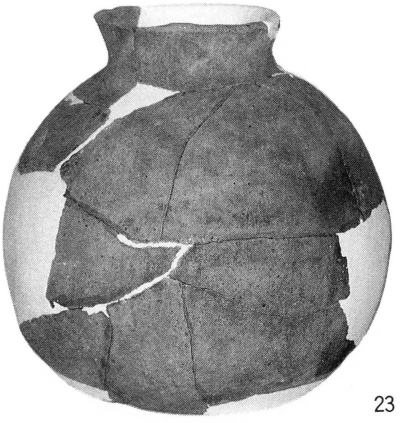
20

21

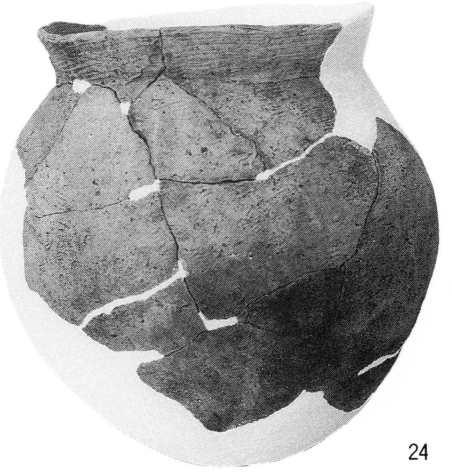


22

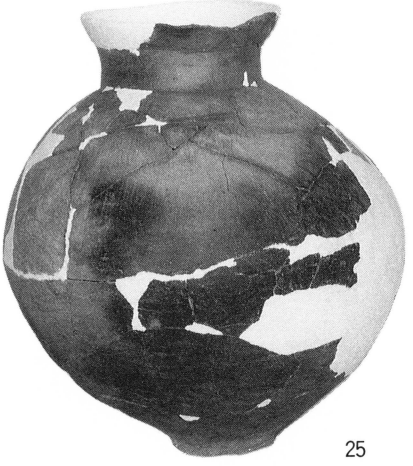
16～22　9号住居跡



23



24



25

26

27

28

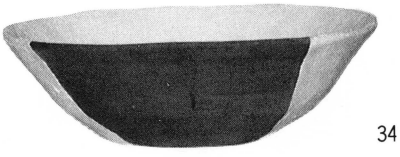
29

30

31

32

33



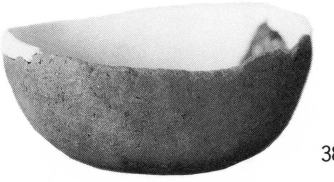
34

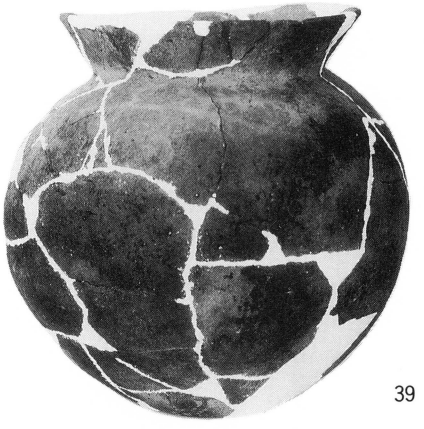
35

36

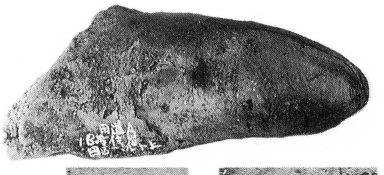
23～25　11号住居跡　　26～36　14号住居跡

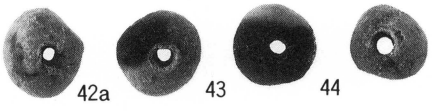
37

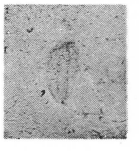

38


39

40


41

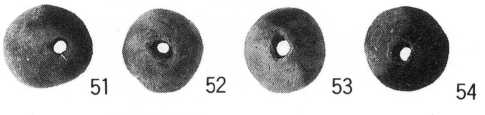

42a 43 44 45


42b

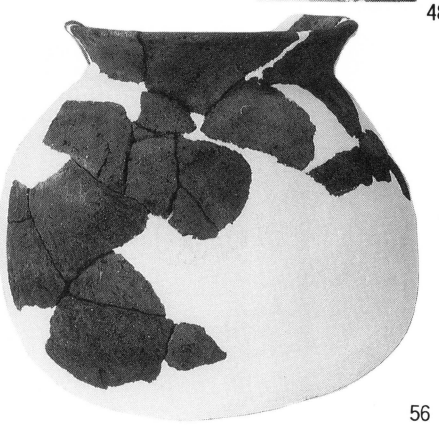
46b

46a 47 48a 49 50

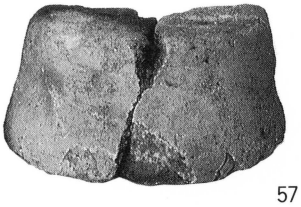
48b


51 52 53 54

55


56

37　14号住居跡　　38・39　16号住居跡　　40～56　18号住居跡



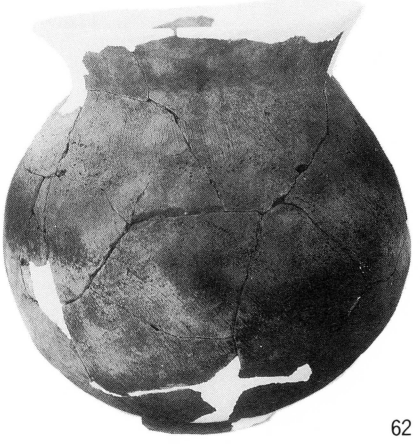
57

58

60

59

61

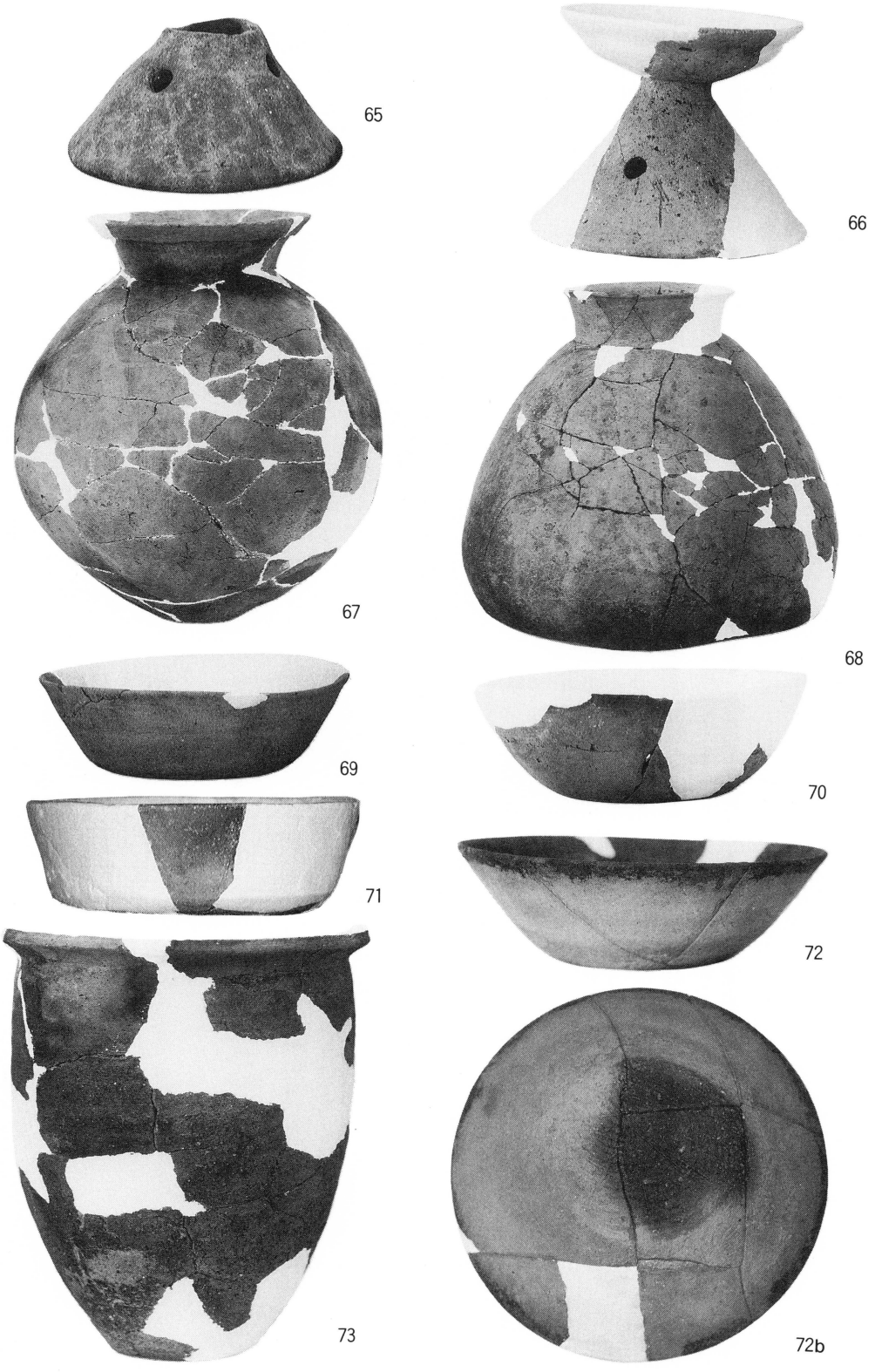


62

63

64

57　19号住居跡　　58～64　1号土壙



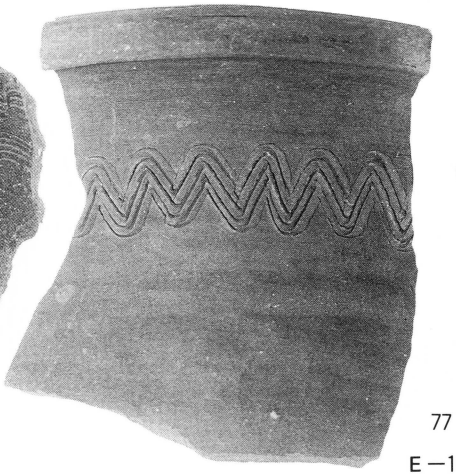
65・66　2号土壙　　67　5号土壙　　68　17号土壙

69・70　4号溝跡　　71　D－6　　72・73　E－10

74　G－9

75　I－9

76　F－12



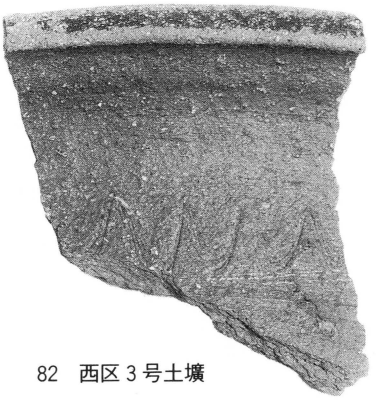
77
E－10

78
E－11

79　E－10

80
E－11

81　表採



82　西区３号土壙

石巻市文化財調査報告書第４集

田道町遺跡 ― A地点発掘調査概報 ―

1992(平成４)年８月31日発行

編集　石巻市教育委員会
発行　石巻市教育委員会
〒986 宮城県石巻市日和が丘一丁目１番１号
☎0225-95-1111㈹

印刷　株式会社　鈴木印刷所
〒986 宮城県石巻市蛇田字新谷地前121
☎0225-22-4101㈹

1992©